

言ハ	産マ	悔ヤ	斬ラ	請ワ
ヒ	ミ	イ	リ	キ
フ	ム	ユ	ル	ウ
ヘ	メ	エ	レ	エ
ホ	モ	ヨ	ロ	オ
也。蓋第五之	十韻皆非 _ニ 雅	語 _一 故詠歌讀書	古今不 _レ 用 _レ 之、是	自然之妙爾

この圖には缺點も少くないが、國語學史上注意すべき點の少からず存するものである。先づその注意すべきことの第一は五十音圖を以て用言の活用を統一的に説明せうと試みたことである。これに似たことは斷片的には契沖も試み、和歌童翫抄も試みてあるが、かやうに組織的に統一して説かうとしたことはこれが恐らくははじめてであらう。次にはその説明の中に「倭語活用云々」と云つたことである。これは嚴密の意味でいへば、後世いふ所の活用といふ語とは差があるであらうが、用言の語尾變化を活用といふやうになつたのは、これが基をなしたものであらう。又その圖表の各段に「未定、已定、告人、自言」などといふ名目を加へたことはその名目は必ずしも當つてゐるとはいはれないであらうが、

しかし、後世、活用に名目を與ふることのはじめをなしたといふべきであらう。しかしながらこの圖には著しい缺陷も存するのである。先づこの圖に「遇」をア行に、「請」をワ行にあてた如きはあるべからざること、著者自身既に「非正義也」とことわつてゐるから追及するにも及ぶまいが、その圖の不十分なことを告ぐる點は見のがすことは出来ぬ。又才列の音を活用としてゐることも缺陷であるが、これも著者自ら之を「皆非_ニ雅語_一故詠歌讀書古今不_レ用_レ之」と指摘してゐるからこれも咎め立てする必要は無いが、その研究の未だ不十分であることを告ぐるものである。要するに、これらの缺點は五十音圖そのままを以て強ひて用言を説明せうと企てた爲に生じた缺陷であるであらう。それ故に概言すればその研究はもとより不完全であるけれども、富士谷氏のあゆみ抄の出來た年から約三十年前にこの表の出來て居たことは輕々しく看過することの出來ないのみならず、その圖は不完全であるとはいへ、後世の用言研究に一種の試案を示した點もあるから國語學史上これも亦一の重要事項である。

谷川の活用圖に次いであらはれたのは賀茂眞淵の語意考にある活用圖である。この書には先づ五十音圖をあげてその各段に

	(ア段)				
初	こは かもの ゆこ 約且 平言				
體	こは かもの ゆこ 約且 平言				
用	こは かもの ゆこ 約且 平言				
令	こは かもの ゆこ 約且 平言				
助	こは かもの ゆこ 約且 平言				

といふ名目を與へておき、後に實際の語をあげて説く所にはア行以外の九行について、たとへば

加行	ゆかん 將行	行の體	今行	令指	こはかもの ゆこ約且平言
	なかん 將鳴	鳴の體	今鳴	令鳴	
			なく	なけ	
					なこ同

といふやうな説明のしかたをしたものである。この圖にはア行を除き、ワ行に「すわる」「うわる」といふ語をあてたりなどしたからして、日本紀通證の附録の圖のやうに假名遣を誤つたといふやうな弊は無いけれども、「もい」(萌)「すゐ」(坐)「うゐ」(植)などのや

うに事實上古今に無い語を加へたといふやうな缺陷もあり、又オ段の音を助言となづけて一の活用と認めた點は日本紀通證の圖と同様であるから學術上の價値はさまで高いものは無い。要するに日本紀通證、語意考の活用研究は、その萌芽といふべきもので未だ十分の學術的價値を認めがたいものである。

富士谷成章は京都の人で、醫官皆川春洞の第二子で、有名な漢學者皆川淇園の弟であつて、十九歳の時、縁家富士谷尹壽の家を繼いだのであるが、安永八年に四十二歳で歿した。歌學は廣橋家の門人として學んだのであるが、深くこの學に志して一家をなしたのである。その著述も少くないが、國語學の著として傳はつてゐるのは、挿頭抄、脚結抄の二種である。かざし抄は門人吉川彦富、山口高端の筆受したもので三卷ある。この書には明和四年仲春の序説があるからその時に出來てゐたものと思はる。京都で出版せられたが、その年月は明かでない。しかし、平田篤胤の古史本辭經には明和四年八月に刻したとある。あゆひ抄は門人吉川彦富、井上義胤の筆受したもので、首卷一冊、本文は四卷を五冊とし(二を上下に分つ)すべて六冊である。この書には安永二年六月の序説があり、安永七年京都で出版せられた。

成章の國語學上の意見は以上の二書で見べきものである。それらの首に載せた序説は筆受した門人の名になつてゐるけれども、もとより成章の意見である。それらの序説のうちでもことにあゆひ抄の首卷の「おほむね」と題する條はあゆひ抄のみならず、富士谷の國語學上の意見を総合的に述べたもので最も重要な點を含んでゐる。そのはじめに曰はく師曰、名をもて物をことわり、装をもて事をさため、挿頭脚結をもてことはをたすく。この四のくらゐははしめひとつのことたまたなり。

とある。これに似たことがかざし抄の首にも述べてある。この「名」「装」「かざし」「あゆひ」の四者の關係を十分に説明した所は無い。しかし、この分類をば富士谷が如何に徹底せしめたかといふことを見るには、かざし抄の首に二首の歌についてその歌を分解して示してゐるものがあるから、それについて見る事が出来る。それは

(挿) かくしつゝ (挿) にもかくにも (装) なからへ (脚) 君 (名) か (名) やちよ (脚) あふよし (脚) もかな
 (挿) いつ (脚) とても (名) 月 (装) み (脚) ぬ (名) 秋 (脚) は (装) なき (脚) ものを (挿) わきて (脚) こよひ (脚) めつらしき (脚) 哉

とあるのである。これは上のやうに國語の單語を漏れなく四種に分けたものであるが、そ

の四種の分類を上二首の歌で示された例によりて見ると、「名」は今の名詞にあたるもので、數詞は如何してよいのか明かでない。代名詞は「こ」を挿頭としたので考へらるる。装は「あふよし」の「よし」を入れたのは理由がわからぬけれども、大體今の用言が装にあたると見らるる。かざしとあゆひとの詳細は後に論ずることとするが、この大體論に於いてはその一々の當否は第二の問題として、その研究が斷片的や一時の思ひ付でなくて、國語の單語一切を網羅して、一貫の原理によつて四種に分つたと云ふことは從來の諸家に比して全く境地を異にしたものといはねばならぬ。もとより富士谷のいふ「名」は從來いひ來つた物の名又は體にあたり、その装は從來いひ來つた用にあたり、かざしは上に述べた虚字虚詞に略あたり、脚結は從來いひ來つた狹義のてにをは又助字助詞などいつたものに略當つてゐることは否認はしないし、又否認する必要もない。そこで、これらについて見るに、その名稱こそ富士谷の創意といふべきであらうが、その實際はすでに從來の人々が、考へて來たことであるから、富士谷はただそれらを綜合したものであらうといふ論もあらうかも知れないが、從來のてにをは研究により生じた虚詞又は虚字の考説と挿頭抄との前後は容易に論斷し難いものである。その故はかの古今集助辭分類は明和六年に成り、

「てにをは網引綱」は明和七年に刊行せられたものであるが、「かざし抄」は明和四年に成つたものであるから、その出版年月は明かでないとはいふが、上の二者より先だつて出来てゐたことは信ぜねばならぬ。假に富士谷がそれらの説を知つてからこれを説いたとしても富士谷のはただ四種を寄せ合せたものではなく、一の原理から統一的の見地よりして施した分類で、この四種の外に他の種のもが入るべき空虚の地もなく、又その四種が、相各侵すやうなもので無いから、ただ漠然と體、用、虚詞、助詞と寄せ集めたものと同一にいふことは出来ないものである。かやうにして國語の單語の上に語性的に施された分類はじめて學術的研究の結果として國語學の上にあらはれた。その分類せられたものの内容の個個については多少の異議があるとしても、かやうなものは從來かつて無かつた研究であつて、後世に至つても、この四種の類別といふ大本は動かすことの出来ないものである。かくの如き大本を樹立したといふことは富士谷の國語學史上に於ける最も大きな功績である。富士谷の上の四種の各論について吾人は如何なることを見得るであらうか。あゆひ抄の大むねの中に

師曰名装かさしはそのふみくあり。

とある。これによると「名」についての富士谷の研究はあつたのであらうが、しかし、その傳はつたものがない。「装」についての書は装抄といふものであらう。その名はかざし抄の序にも見得るものである。しかし、その書は世に傳はつてはゐないのみならず、その兄淇園が成章の遺稿に序した文の中に

三曰^{ヨソレ}粧……而未^レ能^レ成^レ稿而歿。而人惜^レ其一之未^レ備

とあるを見れば、恐くは脱稿しなかつたものであらう。それ故に装に關する説の委しいことは知る由も無い事であるが、あゆひ抄のむねの下に装の大意を説いたものがあるから、それで大要は知らるる。その言に曰はく、

凡 装に二むねあり。事とさまと也。こまかにいへは事二むねあり。事とありなと也。狀に四むねあり。しさま、しきさま、ありさま、かへしさま也。装二むねともいひ、六むねともいふは此よし也。六むねをおしこめて装といふ。むねことに本、末、引、靡、きしかた、めのまへ、あらまし、靡伏、ふし目、たちもとのかすくあることはここにいひつくしかたし。左にいたせるかたかきを見てかつく心うべし。

といひ、装の圖を示した。その圖は次の如きものである。

之より先、日本紀通證、語意考の活用圖があつたことは既にのべたが、今この裝圖をとつて、上の二圖に比較すればその精細にしてすぐれてゐることは言論を費さずともわかる譯である。富士谷の裝圖ももとより五十音圖を基としたものであらうが、それにとらはれず、その活用を説明する爲に自在に利用變形せしめたもので、ここに一種の理想的の圖表を按出した事は驚くべきことといはねばならず、その考察の精しくして大體に於いて當を得たことに感服せねばならぬ。而してその表の横段について見れば、用言の組織について如何に精細に觀察したかを推測することが出来る。先づ「本」といふのは語幹に似た考で名づけたもので、それが一言である時には同時に終止形として用言の本體たる場合をも示した。末とは本と相待つて用言の本體を形づくる語尾即ち終止形としてあらはるるものをさすのである。さて多くの用言にはその本末を補助する「ル」「レ」の活用部分のあることを認めて、それを靡と名づけ、「ル」を靡の本體として「レ」を靡伏と名づけた。さて又「孔」^{アリナアリサマ}「在」に在つてはその活用の「ル」音をば引と名づけ、芝さま鋪さまにあつては「キ」の活用を引と名づけた。又往^{キンカク}は過去、目^{メノマヘ}は現在、來^{アラマシ}は未來の義ではあるが、これはただその意義を示すためのもではなくて、後世の活用形の名目と略同じ用をなす爲に立てた

範疇である。而してこれらの名目はただ、理論上の區別から生じた空論的のものでなくて、それらの名目を用ゐて、各活用形にあらはるる諸の現象、ことにあゆひとの承接を説かむが爲の必要上設けたものであることはあゆひ抄を熟讀してはじめて知らるるのである。凡そこれらの事は從來の研究には殆ど先蹤が無いと云つてよいものであつて、五六十年の後、義門の和語説略圖が出てはじめて之に思はるる。もとよりこの圖には上にもいふ如く不完全な點が無いでは無いが、この時代にかやうな研究の施されたことは驚くべきことである。

「かざし」はかざし抄一部に詳述した所であるけれども、これには總括的の論はなく、各の語をあげてこれを説明するに止まつたものであるから、そのあげた語を見て觀察せねばならぬ。それは、すべてそれらの語を五十音圖の順にならべたもので上卷には、二十六條、中卷には卅五條、下卷には卅五條あつて、一條一語のもあるが、又

いかゞ いかゞは いかに いかなる いかにして いかで
 いかでかは いかばかり

の如く、同類の語を一括して一條としたものもある。それらの語を今の見地より分類して

見ると、

一、代名詞及び代名詞を基とした連語

(例) こ、これ、これやこの、これぞこの、この、ここ、

二、情態副詞及びそれに基づく連語

(例) (上のいかゞの一條を見よ)

三、程度の副詞

(例) いと、いたく、いとゞ、いとゞしく

四、陳述の副詞及びそれに基づく連語

(例) など、なか、なかは、などて、などてかは、

五、接續の副詞

(例) はた また やがて

六、感動の副詞

(例) あはれ、あな、いざ、いざや

七、動詞の連用形及びそれを基とした修飾格

(例) あまり、うち、うちつけ、うちはへて、

八、動詞の終止形を重ねてつくつた修飾格

(例) かへすく、かへるく

九、用言が接續助詞「ば」をふんだもの

(例) たとへば、たなじくば

以上の如くであるから、この「かざし」といふものには種々のものを含み、まだく清撰を十分に施さなければならぬ餘地のあるものであつて、富士谷自身も之を認めてゐたことはたとへば、「へて」について、

但是は全かざしといふべきにもあらず。

と云つた點などでも考へらるる。なほ、これらの説明を精細に見ると、富士谷の意見の卓絶したものが到る所に見らるるけれども、今述ぶる違が無い。要するに、この「かざし」について著しい缺點をいへば、この「かざし」には單語の性質上、「かざし」といふべきものと、語の用法上、修飾格に立つてゐるものとを混同してゐるから、二者錯雜して人をして解し難からしむるものである。それ故に、富士谷の研究の中で「かざし」は最も雜駁

だと評せなければならぬ。しかしながら、この體言用言の外に在り、又助詞と全く性質の異なつた一類をば常に他の主要語の上に冠して用ゐらるるといふ特性に著眼して、これをこの種類の特色と認められたものは古來なくして富士谷によつてはじめて明かにせられた點であるからこれ亦彼の研究の空前である所以の一といはねばならぬ。

「あゆひ」に就いての研究は先づすべての「あゆひ」をば屬(五種)家(十九種)倫(六種)身(十二種)隊(八種)の五類に大別した。この大別は何によつたといふ委しい説明が無いが、「大むね」にいふ所で大體は考へらるる。即ちその直ちに「名」をうくる性質のあるものと無いものによつて、二に大別した。その直ちに名をうくる性質のあるものは屬と家との二類で、名を受けない性質のものは倫と身と隊との三類である。さてその屬と家とは概括すれば、すべて體言に接しうべき點に著眼して一括したが、更にそれら又すべて終止に用ゐらるるか否かを分釋の原理とし、その終止に用ゐらるる性質のものを一類として屬と名づけ、その他のものを家と名づけたのである。さうして屬はその示す意味によつて咏屬、疑屬、願屬、詭屬、禁屬の五に分けたが、「家」には分類を施すことなく、それに屬する語が十九あるから、十九家といふのである。次に直ちに名を受くることの無

い類のものを見ると、その倫と身とは共に用言的の性質を有するものを集めたので大體は吾人の複語尾たるものである。而して隊はそれら名に附くることのないものうちで、活用の形をもたないものを集めた。かやうに、富士谷の脚結の研究はその意義と文法上の性質職能とによつて施したもので、それ自身に於いて論理的秩序を保つてゐるものといふことが出来る。もとよりこれも創始に屬するからして、なほ幾分の矛盾缺點を有することは止むを得ない點であらう。又係結については「うちあひ」といふ術語を用ゐて、個々の助辭又複語尾の條々に於いて、その現象を説明はしてゐるし、又そのいふ所は正確ではあるけれども、これが總括的法則を立てて示すといふことをせず、又係結といふことの本質を示すことのないのは本居よりは劣つてゐるといはねばならぬ。その他、今日の目から見れば、彼是論すべきことは少くないであらうが、とにかくに、精確な論理的見地から研究して施したものである。そのみならず、挿頭の研究でも脚結の研究でもすべて八代集に例證を求めてこれを説いてゐるのであるから、一方から見れば又歸納的實證的研究であるわけである。惟ふに當時世上に於いては恐らくはこのあゆひ抄によつてわがてにをはには一貫の條理があるものであることを教へられて、その井然たる秩序を保つてゐるのに驚い

た事であらう。

富士谷は又言語を研究するには時代を辨へなくてはならぬといふことを説いて六運の説をたてた。六運とは

- 一、開闢より光仁天皇の御世までを上つよ
- 二、其後より花山院御世まで二百五年を中昔
- 三、後白川院御世まで百七十二年を中比
- 四、四條院御世まで八十四年を近昔
- 五、後花園天皇御世まで二百二十二年をとつよ
- 六、そのちを今の世

といふのである。これが、十分に當つてゐるか否かはとにかく、かやうに時世の變遷を眼中に於いて言語を観察することを教へた點も注目すべきことである。

要するに、富士谷の研究は先づその時代に即し、事實に基づき、それらを基礎とし、その上に立つてはじめて論斷を下したもので、それと共に驚くべき論理的な緻密な観察力を有し、文法學の研究法としては堂々たるもので、その功績實に古今に冠絶するといはねば

ならぬ。かくの如く富士谷の國語學史の上に於ける位置はかの契沖以後の大人物として特筆すべきものであらうが、かくの如き偉大な研究は果して突如としてあらはれべきものであらうか。これについては種々の問題もあらうと思ふが、今委しくいふ邊が無い。ここに成章のこの研究はその兄淇園の漢語學の研究の影響を受けたもので無いかといふ問題がある。淇園には助字の研究として詩經左傳史記の助字法を著し、虚字には虚字解、續虚字解の著があり、實字には實字解の著がある。それで、富士谷の彼の四分法はこれら淇園の漢語分類法の影響を蒙つたのでは無いかといふのであるが、淇園のそれらの研究は漢語の總括的分類の基礎の上に立ち實字虚字助字の三類を立てたものでは無くて、古來傳へて來た三類を個々に取扱つたものである。それ故に富士谷が國語の單語を一貫の原理から根本的に四にわけた分類法とは學理上の交渉は無い筈である。私は成章が淇園の影響を受けたであらうといふことを久しい前から説いて來たが、そのいふ本旨は主としてその研究方法の上に於いていふのである。淇園は漢學を學ぼうとするには助字からせねばならぬとして弱年にして既に之が研究に従事したこと、その研究の方法が、事實に基づいて歸納的に研究したこと、これらの點が成章の刺戟となり模範となつたらうと思はるので、その點を

さしたものである。しかしながら、彼の名、装、かざし、あゆひの四分法は富士谷の獨創であつて淇園がその範を垂れたものとは考へられぬ。何となればさやうに實字、虚字、助字の三類から四類を考へ出すよりも、從來から在つた四の類をまとめる方が、早いわけであるからである。この四の分類は既に述べたやうに断片的には當時の舊式のてには研究家でも知り難いものでは無かつたのである。富士谷の前に既に體用の考があり、又虚字虚詞、及び助辭助詞の説が在つたことは上に述べ來た通りである。それ故に體用、虚助の四の類は當時の國語學を行ふものの間にはおぼろげながら知られてゐたことは疑ふべきことではない。富士谷の偉大な譯は單にこの四の分類をあげただけの事ではなく、これを總括して一貫のものとして條理を認め系統的分類を組織した點にあるのである。即ちこれは明かに國語の特性と、それを十分に洞察した富士谷の頭腦との共鳴によつて生じたもので、その學説の成形したのは富士谷といふ人格を待つてはじめて實現したのであるが、それを導いたものは從來のてには研究に對して施された先人の努力であるといふことはいふをまたぬ。

富士谷の國語學は上の如く偉大であつたけれど、その學説の直接の繼承者を得て發展せ

しむる事なくして終つた。かやうな偉大な學説にして直接の繼承者を得なかつたといふことも亦驚くべき現象である。これは一は富士谷が卓絶してゐて、後人の企て及びがたい點があつたといふことにもよるであらうが、又一はその學徒の少かつたことにもよらう。而してその學徒の少かつたのはその術語が難澁であつた故もあらうが、又師承傳授を重んじた舊式の教授法をとつた爲でもあらう。而してその師承傳授を重んじ、祕密を貴んだ爲に術語を難澁にした點もあつたらう。いづれにしても惜むべきことである。さりながら、その公にせられた著書は永く後人に模範を垂れ、後の研究を刺戟したことが少くない。

富士谷の國語學は直接の繼承者が無くて、大なる展開をしなかつたけれども、その學説をそのまま傳へたものは多少あつた。成章の子の成壽（又成元といひ、御杖ともいふ）が父の説を受けて著書も少くない。その國語學に關するものには俳諧天爾波抄、脚結抄翼がある。俳諧天爾波抄は六卷で門人浦井有國の筆受としてある。文化三年の淇園及び有國の序文が在つて文化四年に出版せられた。これはあゆひ抄に倣ひ俳諧のてにはを説いたものである。あゆひ抄翼は卷數は詳かでないが、撰者の自筆の稿本がその家に二冊存してゐる。これは脚結抄の注解で學問上大なる價值あるものとは見えない。この外、父の未定稿

を整理したものであらうか、装抄といふものを傳へてゐる。これは御杖口授、門人福田美楯筆受となつてゐて、成章のものでない事は明かであるが、装圖を理解する参考にはなる。福田には又脚結抄小鈴五卷の著がある。又「脚結抄手引の石」といふ寫本二冊（著者未詳）もあるがいづれも學術上の價值はさほどのものでない。幕末の頃仙臺に保田光則といふ人が在つて富士谷流の國語學を志して著述が少くない。その主なものの名をあぐれば、

挿頭抄増補 三卷

脚結抄考 三卷

脚結抄増補 六卷

新撰装抄 一冊（以上寫本）

装詞打合圖脚結詞打合圖一枚（板本）

その外にも著書は少くないが、ここには略する。この人の研究は要するに或は富士谷の著の誤を正し、或は注解を加へなどしたに止まるもので、大きな成績が在るとも考へられないものであるが、ただ一つ、いふべき事がある。彼は脚結抄増補に於いて五屬の外に

敬屬 呼屬 問屬 助辭屬

の四屬を増した。この増した屬のうち敬屬といふのは

何ます 約ツクメまし せず

何たまふ 何たぶ 何めす 何をす

何らす 何させ 何せ

といふものをあげたものである。これは屬が體言をうくるものであるといふ富士谷の原理を破つたもので、その分類上の學說に於いては絶待的に認むることの出来ないほど誤つたものである。けれども、それらを姑く問題外に置いて考ふる時には敬語に注目して、これを一類として文法的の研究を加へたといふ點にその價值を見出すことが出来る。それ故にその研究は殆どとるに足るものが無いけれど、この敬語に著眼した一點が保田をして國語學史の上に一の地歩を占めさせるものと思ふ。

十四 本居宣長及びその後の係結研究

本居宣長は世の熟知する大學者である。この人は富士谷成章と時を同じうして世に出で、

互に交際もしたことも無く、さうして互に別の方面に於いて國語學の上に大功を立てた人である。この人の著述は多大なものであるが、ここには國語學史上重大なものだけをあげよう。

- てにをは紐鏡 一冊 (明和八年成、版本)
- 字音假字用格 一冊 (安永四年成、五年出版)
- 詞の玉の緒 七冊 (安永八年成、寛政二年刊)
- 御國詞活用抄 一冊 (天明二年成、明治十九年版)
- 漢字三音考 一冊 (天明四年成、同五年刊)
- 地名字音轉用例一冊 (寛政十年成、同年刊)

以上の六種の書は之を大別すると、音韻特に字音の研究、係結の研究、活用の研究の三に歸著する。

まづ宣長の音韻の研究について述べようが、それを論ずるに當つて、その前に於いての音韻の研究の略史を瞥見することにせう。

我が國に於ける音韻の研究には漢字の音の研究と悉曇の研究との二の源がある。悉曇の研究は梵字と梵語との研究を含むものであるが、それが本邦に入り來つたはじめは明かでない。弘法大師が大悉曇章を唐から將來して、それを嵯峨天皇に奉つたことは著しいが、その研究は未だ世に弘まらなかつたやうに思ふ。仁明天皇の御世に智證大師が唐に行き、之を學んでかへつてから本邦に弘まつたもののやうである。さうしてその弟子の安然が勅によつて悉曇藏八卷を作つて今に傳はつてゐる。さうしてその學が連綿として傳はつたが、降つて堀河天皇の頃加賀の温泉寺の僧、明覺がこの學に精通してこの學がよほど世にひろまつた。この人の學問の事は上にも述べたが、當時既に五音の圖があつたことをそれらで知りうべく、又明覺の悉曇要訣には當時の國語の音韻について論ずる所も少くないので、我々はそれによつて、當時の國語の音韻状態を多少知り得るのである。而してそれらの學說の影響を受けて五音相通同韻相通の説などが起つて後世の國語學を開發せしめた點の少くないことは既に述べた。

漢字音の研究もそのはじめは明かでない。持統天皇の御世に唐人續守言、薩弘恪の二人を音博士とせられたことがあり、大寶の制には大學に音博士の官を置かれたが、その教ふる所は専ら漢字の音であつたであらう。當時の字音はどういふものであつたか明かにはい

ひ難いことであるけれど、養老四年の勅によれば、僧尼の普通に用ゐる音と漢音とは差別があつたといふことがわかる。桓武天皇の御世からは漢音を重ぜられて僧侶までも之を用ゐしめられた。爾來儒者僧侶が必要上漢字の音を學んだことは證據が在るけれども、學術的に研究した迹は明かでない。しかしながら、かの五音の圖の源が、それら字音の反切を示す爲に發生したであらうことは既に論じたところである。字音の研究の歴史の上で注目すべきものは韻鏡の渡來である。その渡來した年代は明かでは無いが、龜山天皇の文永年中に明了房信範といふものがあつた。その人が、奈良轉經院の文庫の中に在つた韻鏡を見て、之に和點を施して世に行ひ、ついで後奈良天皇の享祿年中に和泉堺の宗仲といふ人が韻鏡を出版してから、世に洽く行はれ、その注釋書も多く出たが、韻鏡の學術上の價值を明かにするものは殆どなく、多くは反切の用、若くは人の名乗の吉凶を判斷するが如きことに用ゐてゐた。江戸時代に入り江戸の僧淨嚴が悉曇三密鈔七卷(天和二年版)を著したが、そのうちには漢音吳音又五十音の構成にも論及してゐる。契沖の音韻の説明が、淨嚴の影響による所の多いことは世人の知つてゐる所である。次いで京都の僧文雄が唐音悉曇等を學び、韻鏡を研究して磨光韻鏡(本圖二卷延享元年版、附録として韻鏡素隱、翻切門

法、字庫、伐柯篇、指要録、餘論等があり、いづれも出版せられた。)三音正譌二卷(寶曆二年版)等の著があつて、字音の研究は一大進歩をしたと稱せらるる。然しながら、喉音三行の辨、開合等の事を知らなかつたものであるといふ批難があつた。

本居宣長の字音の研究は文雄の影響を受けた所も少くないが、更に一步を進めたものである。その著としては上にあげた字音假字用格、漢字三音考、地名字音轉用例等であるが、いづれも學術上有數の著として重んぜらるるものである。而してこれらは字音の研究たるのみならず、國語の音韻研究の上にも大きな功績を残した。その字音假字用格は主として漢音吳音について字音のなづかひを論じたものであるが、はじめに總論として、喉音三行辨があつて、「アイウエオ、ヤイユエヨ、ワヰウヱヲ」の差別を論じ、次に「おを所屬辨」があり、次に字音假字總論があり、それから各論がある。この書は字音の假名遣にも一定の條理のあるものであるを示してその基礎を學問的に確立したものとして重んぜらるるものである。しかもそのうちに説く所の「おを所屬辨」は鎌倉時代以來の五十音の圖が「オ」と「ヲ」との所屬の行を誤つてゐることを辨じて「オ」はア行に、「ヲ」はワ行に屬すべきものであることを研究し、立證して正しきにかへした點は最も重大な事柄である。この辨

が出て、世人ははじめて正しい五十音圖を知るに至つたもので、かの契沖や眞淵などが説明に窮して隅違に通ふなどと云つて御茶を濁しておいた錯誤を正して鎌倉時代の頃から四百年間傳へ來つた誤を正しきにかへしたものである。これは實に五十音圖の上に於ける劃期的の大研究であつて、我々が今日正しい五十音圖を用ゐ得るのは宣長の賜である。尤も今日では院政時代からの正しい五十音の古圖も追々に世に知られて來て、一毫の疑も無くなつたのであるが、宣長の時代にはそれらは一も知られてゐなかつたのに、かやうな大發見をしたその學識の偉大なるには驚歎の外いふところを知らぬ。漢字三音考は漢音吳音唐音を論じ字音假字用格に漏した事なども説いてある。その附録として説いた音便の事は國語の音韻研究上の一大收獲である。この音便については從來、眞淵の語意考や、文雄の和字大觀抄などにも多少の意見もあつたが、かやうに整頓せられたものを見なかつたのである。地名字音轉用例は本邦の國名、郡名、郷名などに用ゐる漢字の音に、漢音でも吳音でもなくて異様に見ゆるものが在るのについて、その理由を研究したものである。これはその著眼の非凡な點には敬服せねばならぬが、その研究は十分とはいひ難い。一般にこれら字音に關する宣長の研究には矛盾した點も不十分な點も多少あつて後人の研究をまつものが少くない。而して、彼はこの字音の研究の書の中で、寧ろ國語の音の性質を明かにし、「おを」の所屬を正し、音便を論ずるなど、國語の音の研究に於いて大功を立てたといはねばならぬ。

かくして宣長のこれらの研究は後の時代に多大な影響を及ぼし、之を繼承補正したものが少くない。その「おを」の所屬については義門の「於乎輕重義」(後にいふ)が出て、その説を一層確實に證明し、地名に用ゐた字音及漢字の韻に「ン」「ム」の區別あることは義門の「奈萬之奈」(これも後にいふ)關政方ミヤマタの備字例一卷(天保五年成、同十三年刊)が出て、その缺點を補つた。字音の研究は太田全齋の漢吳音圖一卷、漢吳音圖說一卷、漢吳音圖一卷(いづれも刻本、文政十二年成)が出て、これが研究に一時期を劃した。又黒川春村の音韻考證(文久二年に稿す。二十二卷と傳ふ。)があつて、漢字の古韻を考へ、字音の古今正訛を論じた。春村の門人白井寛蔭は音韻假字用例三卷(圖一卷、附說二卷、萬延元年出版)を著して字音の假名遣を研究したが、その附說に於いて本居の字音假字用格を批評は正して略餘すことなく、字音假名遣の研究はここに至つてはじめて大成せられた觀がある。しかし、その説は多く師匠の春村の説であると傳へてゐる。その後には岡本保孝

の音韻答問録一卷（寫本）があり、正確を以て稱せらるる。

宣長の國語學上に於ける最も大きな功績は係結の研究である。それはてにをは紐鏡と題する一覽表を以てその大綱を示してあるものであるが、その詳細な説明を施したものが、詞の玉の緒七卷である。先づ紐鏡について見るに、係結の關係を三種に分ち、係詞でいへば、「はも徒」「ぞのや何」「こそ」の三種として、結詞も亦これに應じて三種に分けて表示してある。かやうに三様に係結の關係の存することは古來皆人の歌に文に用ゐて來た事實であつて宣長によつてはじめて規定せられたものでは無いのである。さうしてその一々の例をさがして行けば、多少ともその先蹤は知らるるのである。ことに著しいのは梅井道敏のてには網引綱との關係である。私は本居の藏書印あるこの本を偶然手に入れたが、この本は宣長の藏書目録にも載せてある。これは紐鏡より一年前に世に出た本であるが、これの下巻と詞の玉緒の第一卷の組織とをくらべて見れば、精粗の差はあるけれど、相通する所のあることは著しい。ことに「つつ」「かな」を結辭とすることは手爾波大概抄の「筒留」などの餘波であつて、舊式のてにをは學者のすべていふ所であつて、てには網引綱にもまたこれを結辭の末においてゐるが、玉緒もまた之を末においてゐる。それ故に本居の

この研究の資料は從來のてにをは研究から得たものであることは疑ふまでもない。しかも、これを從來の研究に比べて見ればその所説の精粗の差は非常の違ひである。然らば本居の功績はその表なり研究なりの詳細になつたといふ點にあるのであらうか。然れども未だ遠かにかやうに斷言は出來ない。紐鏡は一覽表であるからこれを細かに論ずる譯には行かぬ。玉の緒の第一卷は紐鏡の順序に従ひ、それぞれの結詞に對し一々證歌をあげて之を證明した。さうして紐鏡は係辭に對しての三轉の別を示したものであるが、三轉の別のない「まし」「らし」「つつ」「かな」は載せなかつたが、玉の緒はこれらについても説いてゐる。第二卷には結詞の異例なものを説き、三、四、五の三卷は係辭及びその他のてにをはについて論じ、第六卷はむすび辭について特に論ずべきものを取りだして論じてゐる。以上の場合にはすべて主として八代集から證歌を引いて論じてゐる。第七卷は古風イニシヘブリの部と文章の部とで、古風の部では主として萬葉集のてにをはを論じ、文章の部では古今集の序及び詞書、土佐日記、伊勢物語、源氏物語のてにをはに就いて論じ、てにをはのとゝのひは歌文に通じ古今に互りてかはらない事を論じてゐるが、それらはすべて一々實證をあげて論じ獨斷の弊に陥ることを避けてゐる。

玉の緒は係結の研究に於いて空前の大著述と稱せらる。何を以てこの名譽を荷ふのであるか。彼の研究は時代を劃つて一々例證によつて歸納的に論斷した。これはその研究法の正當なことを示すものであるが、かやうな事は富士谷も之を行つた。玉の緒の第三四五の卷々には所謂「てにをは」の個々について論じてゐるが、その部分にはあゆひ抄の研究よりも精細な點が無いでもない。しかし、その研究は斷片的で、富士谷の研究の組織的なものに比ぶれば遠く及ばぬ點がある。紐鏡及び玉の緒の研究は主として係結の研究にあるのである。この係結といふものの關係のあること、又その係結の個々の事實については古來何人も知つてゐて、之をあやまらず用ゐて來たのであるけれども、本居が示したやうに係結に一定の法則のあることを一般的に統括して論じた書は未だ曾て無かつたものである。本居は之を一括して統論した。この點は前人の企てもしなかつた所である。然らば、それを以て彼の功績と稱すべきであらうかといふに、未だ遽にさうと速斷することが出来ない。この係結は古から誰人も行ひ來つたことであり、多少は先人も研究して來てその事實は明かになつてゐたものである。それ故に本居の功績はその條理の存するものだといふ事を一の系統あるものに組織して示した點にあるといはねばならぬ。而してこのやうに井然たる

秩序のあるものであるといふことは紐鏡によつてはじめて明かに示されたもので、この點に於いてはじめて本居の研究の偉大なものであることを認むべきものである。然れども私の本居のこの研究に驚嘆を呈せざるを得ないのはそれら外見上の秩序井然たる點に止まらないので、その奥にある。それは本居がどうして

は、も　ぞ、の、や、何　こそ

をば係辭と認め、他のてにをはを係辭でないと認め得たかといふことである。從來のてにをはを研究家も本居宣長後の研究家も「ぞ、や、こそ」などを係辭とは認めたではあらうが、「は」「も」をば特に係辭と認めたことの如きは實に空前絶後の大發見であつて、その緻密な觀察、その鋭利な頭腦には驚嘆の外いふことを知らない。而して「は」「も」を係辭とすること及び係辭の本義が陳述の支配にあるといふことは明治大正の時代の國語學の大家を以て自任する徒までも未だ識別し得ないものもあるのに、それを百年の昔に易々として識別し得た本居の學識の偉大さは眞に譬ふるに物も無いのである。本居の功績の第一はこの係辭といふものを他と甄別して明かにした事に存するので、第二にその係結の關係の井然たる次第を秩序正しく世に示したること、この二點に存するのである。この點に於いて古來

何人も本居に及ぶものが無いのである。

詞の玉の緒が出てから、この玉の緒といふものが、國語學界を風靡して、多くの末書が世に出で、所謂玉の緒學者といふ名目までも生じたものである。それら末書の名目は一々あげないが、それらのうちには全く玉の緒により、その補遺をなしたものがあつた。詞の八千種三冊（珠阿彌撰、寛政十年刊）玉の緒補遺六冊（中島廣足撰、嘉永七年刊）の如きがそれである。又玉の緒の言遣、例證等の誤を正したものがあつた。玉の緒繰分五冊（義門撰、天保十二年刊）などがそれである。又別の見地から互爾乎波を説いたものもある。助辭本義一覽二冊（橋守部撰、天保九年刊）がそれである。かやうにさまざまのものがあつたけれど、いづれも、玉の緒の範圍外に出たものではない。然るにそれら多くの末書とは見地を異にして一の異彩を放つものがある。それはてにをは係辭辨である。これは萩原廣道の著で、一冊の書で、弘化三年に成り、嘉永二年に出版せられた。この書は玉の緒研究史にとつては可否二様の意味で重要な地位に立つものである。この書のとるべき所は第二段の係辭として本居が「そのや何」の四種をあげた事に對して、その「の」が係でないことを論證し、それが係のやうに見ゆるは餘情を含めた略語の格であるといふことを明かにし、「何」も亦

係でなくて、それが係のやうに見ゆるのはその下に「か」を含むか、又は餘情を含んだ格であることを明かにし、而して本居が「か」を「や」に附屬するものやうに説いたのは誤で、「か」は係辭であるといふことを斷定し、又玉の緒第二卷に變格と云つてゐるのは一は餘情を含んだ略語の格であり、一は「何」の下を通常の終止で結んだもので「何」が係辭でないから、この方がかへつて常格であるといふことを明かにした。この點は玉の緒の原理の誤を正し、不足を補つたもので、從來の諸家が玉の緒の説明の文句をとらへて揚足をとつたり、證歌が足りないなどと云つて、それを補つて得々としてゐた幼稚な考の輩に比ぶる時は眞に鷄群の一鶴と評してもよい程の成績である。しかしながら、第一段の「はも徒」とある「徒」を誤解して「は」「も」の外「て」「に」「を」「の」「ば」「ど」「より」「ま」で「へ」の如きものをも「は」「も」と同じ種類の語と認め、これらを合して徒といふべきことのやうに云つたのはこれは實に重大な誤で、紐鏡、玉の緒の眞意を知らないものである。紐鏡には

上にこそ、ぞ、の、や、何、は、もなどいふ辭のなきを今かりに徒といふといひ、玉の緒には

徒とはは、も、ぞ、の、や、何、こそ、などいふ辭のなきを今かりにかくいふ也

とある。徒とは零といふことで何もないことをいふので、他のものを含めていふといふ意味ではない。即ち論理的に他を拒斥した語であるのに、之を他を含めたものと正反對に解したといふことは言語道斷といはねばならぬ。かくして萩原は第二段の係辭に於いては大なる貢獻をなしたにかゝはらず、第一段の係辭に於いては上の如き大誤謬を冒したのである。然るに彼の言が一度出てから、第二段の係が彼の言の如く訂正せられたと同時に第一段の係は彼の言の如くに誤解せられて本居の根本義が埋没し、爾來係詞を説くもの皆之によつたからして本居の説を矯め、後世を誤つたことはここに百年に垂んとする。要するに廣道はこの點に於いて功罪相半すといふべきものである。

本居の用言の活用の研究は御國詞活用抄によつてこれを見る。この書は平田篤胤の古史本辭經にもその名が見えて世に知られてあつたけれど、刊行せられず、寫本で傳はつたが、明治十九年に小田清雄スガヲが補訂して刊行してはじめて世にひろまつたものである。古史本辭經には

彼、八衢てふ書はも故鈴屋翁の天明といひし年間に御國詞活用抄と名けて古言の活用

を二十七會にわけて著されたる物の有るに本づきて作られたる物なり

と云つてゐ、本居全集の例言によれば、天明二年の頃に起稿したものと云ふ。これは用言の語尾變化を廿七の部類に分ち集めたものであるが、その各部類の目を會と名づけたものである。その廿七會を現今の術語にあてて大略を示す時は次のやうになる。

一——六

(四段活用)

このうち第四會にナ行變格を加へ、第六會にラ行變格を添へた。以下みな大略そのやうにある。ここには大體をいふだけだ。

七——十五

(下二段活用)

十六——二十二

(上二段活用)

二十三

(ア行下二段用)

二十四

(カ行サ行三段活用)

二十五

(一段活用)

二十六

(クシキ活用)

二十七

(シクシキ活用)

かくの如くで、それらの類別はまだく錯雑した所がある。なほ又そのあげた活用は第六會までは

第一會 カ、キ、ク、ケ

の如く四段の活用をつくしてあげたけれど、第七會以下は

第七會 ケ、ク、クル

の如く三の活用しかあげてないものであり、頗る不完全なもので未成品といふべきものである。この圖は天明二年の頃に稿せられたとすれば、脚結抄の刊行に後ること四年である。これを脚結抄に載する所の裝圖に比すれば、その論理は徹底せず、觀察も周到でないといはなければならぬ。若し、かの裝圖を見て作つたとすればかやうな不完全な表とはならなかつたであらう。それ故に脚結抄の後に出了といふけれども、その影響はうけなかつたものであらう。思ふにこの表は彼の紐鏡の結辭の圖表と頗る通ずる點があるから、それらから導かれたものであらう。恐らくは紐鏡から複語尾の部分を除き、語意考の活用表などを斟酌してつくつたものでなからうかと思はる。しかし、紐鏡には「レ」音の添はつた活用をも示してゐるにこれにはそれを載せない。その理由は今日に於いて知ることが

出來ぬ。さてこの圖表はかくの如く少からぬ缺點はあるけれど、彼の活語斷續譜、又詞の八衢の基となつたものであるから歴史上の位置は輕くないものである。

以上述ぶる如く、宣長の國語學史上の位置は富士谷とは別の境地に於いて、古今に卓絶した地位を占めてゐるといふべきである。而して、その學の基づく所を見るに、師眞淵の影響は古事記傳等の注釋の上には著しいものがあるけれども、國語學上の成績にはその影響と思はるものを見ない。その音韻の研究に於いては殆ど空前の地位に立つといふべく、その係結の研究は主として従來のてにをは研究の成果を綜合し、之を活眼を以て觀察整頓したといふべきものであつて、富士谷の影響は之を認むることは出來ない。しかも従來のてにをは研究が、かかる絶大な學説を生ぜしむるやうに至つたのは宣長の人格の力であつて、この人にしてはじめてこの成績をあげ得たといふべきである。而して、その用言の活用の研究の如きは係結の研究の餘波にすぎないものである。

十五 鈴木朗と本居春庭及びその後の用言の研究

本居の學徒は汎く四十餘國にわたり、人才もこの間に多く出で、國語に關する著述をなしたのも稀では無いが、それらの中でも傑出したものは鈴木朗である。

鈴木朗（又「胤」とも書いた）は名古屋の人で、離屋と號した。醫を業とし、儒學に精通したが、後宣長の門に學んだもので、天保八年七十四歳で歿した。その著書は少くないが、語學に關する著しいものは希雅、雅語音聲考、言語四種論、活語斷續譜である。そのうち希雅は漢語の音聲を論じたもので、爾雅の釋詁に倣つて自己の見識を述べたものであるが國語に直接の關係が無いからここには論じない。雅語音聲考は既に述べた。

言語四種論は一卷で、文政七年出版の單行本があり、後に柳園叢書第一卷として活語斷續譜と共に出版せられたものもある。この書には國語の單語に「體ノ詞」「テニヲハ」「形ノ詞」「作用ノ詞」の四種の大別があるといふことを主張したものである。このやうに四種ある事を主張する點は富士谷の説に似てゐるやうであるけれども、その説では第一にその「テニヲハ」といふものは一方では四種の一としてゐると共に、他方では形狀の詞作用の詞の「終リニ附キテハタラク」ものをも「テニヲハ」と云つてゐる。即ち彼の「テニヲハ」といふものは一方では單語と認め、一方では單語の内部に存する部分と認めたといふやうな論理上の缺陷がある。又形狀の詞、作用の詞の二は彼もいふ如く、「用ノ詞ハタラク詞」など云つて古來一にして來たものを二種に分けたことは贊成しがたい譯では無いけれども、元來、用言の内部の小區分とすべきものを體言と同列に論じたことも、論理上の缺陷である。而してこの用言の研究は富士谷の裝の説に基づいてゐることは明かであつて、その異なる點は富士谷が「有り」を「孔」として大綱の「事」のうちの一目として小目の事と對立せしめ「遙かなり」の類を「在」として「狀」の一部とし、「有り」「遙かなり」を二種に分ち屬せしめたのを合一して「有り」「居り」すべて形狀の詞としたのであるが、これは富士谷を祖述して一步を進めたものと見ることが出来る。この言語四種論は四種の大別があるといふ統括論については到底價値を見ることが出来ないけれども、その個々の詞については有益な研究をした點が少く無い。然しながら、鈴木の國語學史上重きをなすべきものは活語斷續譜の上に存するであらう。

活語斷續譜は一卷である。久しく寫本で傳へられたが、柳川春蔭の柳園叢書の卷一に收められて刊行せられた（その年月未詳。幕末の頃か）。柳園叢書の本は著者自筆の稿本によつたとあるから疑ふべからざるものやうであるけれど、その表の右の部分には詞の八

一等
二等
三等
四等
五等
六等
七等
八等

ア ク ケ	飽 ク キ カ	此 等 ト	一 行 ゴ	ニ 詞 ツ	バ タ リ	ト コ	ハ 活 用 抄	ヲ 見 テ シ	ル ベ シ
ク		本 語 ニ テ	ト マ ル	ク ト ニ ツ マ	ク ト ニ ツ マ	ク ト ニ ツ マ	ク ト ニ ツ マ	カ シ ニ ツ	マ ク
ク		下 ノ 詞 ニ	ツ マ ク	ノ ム ス ビ	ハ モ ガ ニ	ツ マ ク	ツ マ ク	ヨ カ ニ ツ	マ ク
ク		バ シ ニ ツ	バ ク	ラ ン ニ ツ	ナ ク ニ ツ	ラ シ ニ ツ	メ リ ニ ツ		
キ		下 ノ 詞 ト	並 ベ 云 ト	キ シ ケ リ	ア リ ニ ツ	マ ク	ツ マ ク	オ ホ ス ル	意 ノ ネ ル
ケ		現 在 ニ テ	バ ニ ツ マ	ク バ ニ ツ マ	ビ コ ソ ノ 結	古 文 ノ 結	テ モ ク シ	ル ト ナ コ	ク ド ニ ツ マ
ケ		命 ス ル コ	ト バ ル コ						
カ		未 來 ニ テ	ク バ ニ ツ マ	ク バ ニ ツ マ	ツ マ ク	ツ マ ク	ツ マ ク	命 ス ル 意	古 ノ 意
カ		シ ム ニ ツ	マ ク	マ ク	マ ク	マ ク	マ ク	命 ス ル 意	古 ノ 意

活用
第一會抄

衢の「うくるてにをは」を旁書し、上部に四段下二段等の名目を記してあるから、これらの點は八衢の出來た文化三年以後に記入したものであることは明かである。又その表の中には「和語説略圖ノ」と肩書して、その術語たる截斷言(一)連體言(二)連用言(四)已然言(五)使令言(六)將然言(七)といふ名目を注記してあるのを見る。これは天保四年以後に記したものである。以上の如き注記によつて本書の出來たのは文化三年以後といひ、或は天保四年以後であるといふ説があるけれども、この書の名は文政七年に出版した言語四種論の中に見ゆるから、それよりも前に著したことが明かであり、國語學書目解題には享和三年六月に成るとあるが、これは據のあつての記事であらうから、上の説はいづれも成立しないであらう。それで、上の記入はその成稿したものの上に加へたものであらうが、その記入者が鈴木自身か又は後人か明かにはいはれない。この斷續譜には別の寫本があつて神宮文庫に傳はつてゐる。これには八衢や和語説略圖の名目等の記入が無いのみならず、柳園叢書本とは頗る體裁を異にしてゐる。その神宮文庫本の一例

さうして神宮文庫本には七等八等の所に「此二等ワクルニオヨバス一ツニスヘシ」と記してあるが、この記入は鈴木自身か他の人が明かでない。その故はこの本の表に「此譜書入候乍御面働御熱覽被下思召一盃ニ御直シ可被下偏ニ奉希候以上 朗」とあるから、この依頼を受けた人の記入であらうと思はるる事情があるからである。柳園叢書の本は左の袖書が微細にわたつてゐるが、これには八等を七段に改めた。その一例を略してあぐると、

活語格 第一格	飽 ケクキカ	此段ニハ一行ゴ トニ詞一ツ、ヲ 標 ^{シル} ア ^グ クハシク ハ活用格ヲ考ヘ 見ルベシ	第一段	本語ニテ キレスワ ル	第二段	下ノ詞ニ ツゞク	第三段	ベシニツ ゞク	第四段	下ノ詞ニ 並ヘ連ク	第五段	現在ニテ クバニツゞ ク	第六段	オホスル コトバ	第七段	未來ニテ クバニツゞ ク
		ク	ク	ク	キ	ケ	ケ	カ								

かくの如く異同のあるものであるが、この柳園叢書本と神宮文庫本とは明かに連絡のあるものであり、しかも柳園叢書本が後のものであることは明かである。それは神宮文庫本に

上にいふ如く七八等を一にすべしと附記してある如く、柳園叢書本には改めてその指示の如くに一とし、かくて、その「等」といつた名目を段と改めたものと考へらるるからである。然らばその改めたのは何時頃であるかといふに之を明確に示すべき徴證は無いけれど、言語四種論に「斷續譜ノ第四等コレ也」と記してあるから、文政七年には未だ「等」といふ名目を用ゐて「段」とは改めなかつたものであるといふことと共に、神宮文庫本がもとであるといふことも明かである。なほ又この書は宣長の御國詞活用抄の影響を受けたことは次にいふやうに明かであるが、神宮文庫本には、盛んに「活用抄」の名をあげてゐるのに、柳園叢書本には活語活用格又は單に活用格といつてゐる。而して言語四種論にも同じく活語活用格又は活用格といつてゐる。その點は柳園叢書本と言語四種論と同一である。さうしてみると、この活語活用格といふものは本居の御國詞活用抄に基づいて鈴木が、別に編じたものであらう。若しさうだとすると、言語四種論の時には活語活用格が出来てゐたが、神宮文庫本の出来た頃にはその活語活用格がまだ出来ず、専ら御國詞活用抄によつたものとする、それはよほど古く出来てゐたもので、享和三年に成つたといふことが信すべきことであらう。

さてこの書はその各活用の語については御國詞活用抄によつたことは著しくて、それに些少の變更を施したものである。それは活用を二十八會及び「有り」「居り」の二十九類にわけたものであるが、御國詞活用抄に存する弱點は多少救はれた點がある。その一例をいふと、活用抄に第三會下といふ一目を立て「ナ、ニ、ヌ、ネ」と標出して「往ぬ」「死ぬ」の二語をあげ第十八會に「ニ、ヌ、ヌル」と標出して同じく「往ぬ」「死ぬ」の二語をあげたのを一にし、第三會下を廢して第十九會に

往イヌ ヌ ニ ヌ レ ネ ナ
ヌ ヌ ル ヌ ニ ヌ レ ネ ナ

としてあげたものの如きことである。しかしながら、まだ缺點が少くない。たとへば、第十會の「寐イヌ」と第廿四會の「寐ヌ」とを異なる種類とし、第十一會の「アタフ」と第廿四會の「經フ」とをも異なる類としたこと又廿五會に「居ウ」「爲ス」「來ク」を一括して置いた點など、活用語の研究としては未だくゞ未成品たることを免れぬものである。然れどもこの研究の主點はこの活用語の種類の研究に在るのでないから、これを以てこの斷續譜の價值を論ずるのは當を失するものであらう。

この斷續譜を以て御國詞活用抄に比ぶると活用抄は四段以外のものは三又二の變化をあげるに止まつたもので、すべての變化をあげつくしてゐないものであるが、斷續譜はすべての變化をあげつくしてゐることは上にあげた一二の例でもわかることである。然らばこれを以て斷續譜の功績とすべきであらうか。しかしながら、かくの如きことは既に富士谷の裝圖に於いて略大成してゐるものである。ただ裝圖には「居る」を「う」「ぬ」の活用としたこと「思ふ」に「ほ」といふユクサキ「來」の活用があるとし、「落つ」に「と」といふ「來」の活用があるとしたやうな缺點があるのに、斷續譜にはかやうな缺點もない。これらも斷續譜の價值を高むる點ではあるが、それらは未だ斷續譜の本質に觸れたものではない。

斷續譜の本旨はその序文に

活語ニ二種アリ。二ツ共ニ詞ノ末ニ、テニヲハノツキテ、其テニヲハ各キレ續キニヨ
 リテ活用ノタカヒメアリ。(中略) 今其斷續ニヨル違ヒメヲ譜ニアラハシテ其各ノ類
 ヒニ定格アル事ヲアカシ云々

とあるやうに、その活用によつて或は終止として切れ、或は他の語、助詞、複語尾につゞくべきさまを明かにして以てそれが一定の範疇を立てようとした點にある。ここにまづ、

その活用語の變化が、「きれ、つゞき」の如何によるといふことに注目して研究を施した點を認めねばならぬ。しかし、ここに氣がついたといふことは鈴木をはじめとするものではない。てにをは綱引綱に既に「てにをはの義數品あるやうなれども、所詮は切と續との二ツ也」といふやうに、一般にわが國語の法格は斷か續かといふ二點を注意の焦點としたものであつて、玉の緒にもまたこの言がある。斷續譜はこれらの言などに暗示を得て、かやうな研究をも施すに至つたのであらう。然らば斷續譜は何を企てたのかと考ふるに、彼れはその切れ或は續くことが、用言の活用變化を起す源であつて、さやうにして活用の變化する間に一定の條理があるものであるといふことを明かにせうとしたものであると思ふ。而して、その一定の條理を具體的に示すものとして、ここに横縦二方面に於いて、各一定の範疇を立つるを必要としたものであつて、その結果を一覽表にしたものがこの斷續譜である。そこで、横には八等又は七段の活用の形式を範疇とし、縦には二十八會及び附一會の範疇を立てたものである。それ故にこの斷續譜の目的は今日の語でいふならば活用の種類と活用形の範疇とを明かにせうとしたのであつて、しかも、その活用の種類の識別はこの活用形の範疇を立てて、確實な基礎の上に研究することによつて明かにせらるるものである。

るが、その主眼點はその活用形の範疇の立つか否かに存するものといはねばならぬから、随つて斷續譜の本質はその活用形の範疇を立てようとした點に存するといはねばならぬ。彼はその範疇をはじめは八等にわけたが、後には七段にした。その各段を今の術語でいふと、

- 第一段 (終止形の本體)
- 第二段 (連體形)
- 第三段 (終止形の一作用「ベシ」につゞく所)
- 第四段 (連用形)
- 第五段 (已然形)
- 第六段 (命令形)
- 第七段 (未然形)

となるのである。而してこの譜に於いて著しいことは各段の順序が五十音圖の段の順序に拘泥せずして一種理想的の排列をした點にある。然らばこれは鈴木の獨創であるか或は基づく所があるかといふに、この譜はかの富士谷の裝の圖に酷だよく似てゐるのを見る。但し、裝圖には「靡」などといふ名目を設けたが、これにはさやうな名目を設けないから、

それらの點はもとより差別はあるが、その靡などのない用言で、同じ種類の用言についての部分を抽い來て比較すると次の通りである。

斷續譜		裝圖	
	第三會	事	事
	アガツ テツチタ	打	本末
一段	ツ		つ
二段	ツ		
三段	ツ		
四段	チ	往	ち
五段	テ		て
六段	テ		
七段	タ		た

ここにはその範疇の立て方に精粗の差があるだけで、その活用の形の變化を盡した點と、その變化の排列の順序とが全く同一である。次に靡のあるものについて見ると

斷續譜		裝圖	
	第九會	事	事
	アツ ツツツテ レル	捨	本末
一段	ツ		つ
二段	ツル		(つ)靡
三段	〇ツ		
四段	テ	往	て
五段	〇ツレ		
六段	テ	目	て
七段	テ	來	て

(つ)靡
〇レ

の如くである。斷續譜の第三段は今日の目から見れば、第一段の一現象であるからこれを立てない裝圖の方が當を得てはゐるが、それを除けば、「ツレ」の位置だけの差である。裝圖の「靡伏」を最後においた事も條理が無いとはいはれないが、斷續譜はその斷續の關係からして五段においたものでそれは遽かに甲乙をいひがたいが、要するに斷續譜は裝圖に比して精粗の差があるといふことが差別の主眼となるものであつて、その排列はまさしく裝圖を基として更に考察を加へたものであることは著しいのみならず、その第一段の注と裝圖の末の精神とは一致すべき點があり、第五段第六段の説明と裝圖の「往」「目」の説とは殆ど一致したものである。かやうであるからこの斷續譜と裝圖とはこの點からいへば歴史的に見て一系統に屬するものであることは斷言し得べきことである。さうしてかの裝圖の難解の點はこの斷續譜によつて除かれたといふべきである。

要するに活語斷續譜は御國詞活用抄を經とし裝圖を緯とし、之に紐鏡を参照して織り成したもの（紐鏡を参照したことはその説明に係結の關係を記入してあるのでわかる）といふべきもので、それらの短所を去り、長所を助成したものだといはねばならぬ。この斷續譜は經なる活用の種別の上にも、緯なる活用形の範疇の上にもまだ未成な點があつて完成し

たものとは認め難いものではあるが、用言研究の歴史からいへば、富士谷成章本居宣長の二流を合一せしめて一の大きな主潮たらしめ、以て後の用言研究を導き出したものであるから、歴史的には重要な地位を占むるものである。

本居春庭は宣長の長男で、寶曆十三年に生れた。幼より父の志を嗣いで研究に志しその學大きに進んだが、三十三歳の時病によつて明を失つた。然れども研究に怠らず門人の數は父に劣らない程であつた。文政十一年に六十六歳で歿した。その著書は多くは無く、國語學に關するものは詞の八衢、詞の通路の二部だけである。

詞の八衢は二卷の書で、文化三年三月に成り、同五年に出版した。この八衢は實にわが用言の活用に一定の條理があるといふことを明確に示した大著である。本書の總説に於いてはまづ、詞のはたらきは複雑で、多岐なものであるけれども、一定の條理があつて、これによらなくては語をなさないものであるといふことを論じ、その多岐複雑な間に存する一定の條理の秩序正しい有様を示さうとすることを主旨とするといふことを述べ、さうして多くのはたらきの中に主たるものが四種あるといひ、それらに名目が無くては研究に不便であるとして、その四種の活に對して

四段の活ハタラクキ 一段の活 中二段の活 下二段の活

といふ名目を立て、この他には「し、しき、しく」又「し、き、く」とはたらく詞のみであるとし、なほ四種の活の同じたぐひで、いさゝか活きざまのちがふものがあるとしてそれらを變格と名づけ、以上で、用言の一切の活きを網羅したものとした。さうしてその四種の活の圖をあげてあるが、その圖には「受るてにをは」をそれぞれ注記してある。なほその圖の左旁、下二段活の欄外に「う」「く」「す」等には「切るゝことば」、「うる」「くる」「する」等には「續くことば」、「うれ」「くれ」「すれ」等には「こそ」の結辭などそれ／＼記し、なほ四段活用の「く」「す」「つ」「ふ」「む」「る」等の段の右旁欄外には、

此處四段の活と一段の活とは切ると續くとをは兼て一ツなるを中二段の活、下二段の活にては二ツにわかれたり。

とも記してある。さうして、縦には四種の活の各について概説を下し、横にはかの斷續譜に云つたやうに、其のてにをはに續くとか、用言につづくとか體言につづくとか、切るゝとか、「そのや何」の結、「こそ」の結とか、下知の詞とか、それ／＼語尾の性質用法に論及し、その他俗語の活にも論及した點がある。さて一般論を終へて後は五十音圖の各行に

分けて項を立て、四種の活及び變格についてそれらの音によつて活用する種類の語の活用表をあげて説明し、その活用をなしてゐる語を集めて示し、必要と思ふものについては一古書から出典を示して論證してゐる。しかしながら「しく、し、しき」の活、「く、し、しき」の活については總論で一と言つただけで各論にあぐることがない。

今本書に詳かに述べてゐる活用を見ると、

四段の活

一段の活（今の上一段活用で、下一段活用の「ける」は認めてゐない。）

中二段の活（今の上二段活用）

下二段の活

變格加行 來ル

左行 爲ル

奈行 往ル 死ル

（良行變格については總論に少しく之に觸れた點があるけれど、詳かには説かぬ。）

以上の如くであるが、これらは古史本辭經にいふ如く、御國詞活用抄の影響を受けたことは著しいことであつて、活用抄の中にあげた許多の例語はもとよりこの書に攝取せられたものであることは著しいのである。さても御國詞活用抄とこの詞八衢とを比較すると前述の如く影響を受けたことの著しいのはいふをまたないが、その御國詞活用抄から、直ちに詞の八衢に發展し得たとすれば、春庭の偉大さは非常なものであるやうに思はるのである。しかしながら、恐らくはその中間に活語斷續譜がはさまつてゐて、それが研究上の階段をなしたものでないかと思はるのである。宣長の歿後その門人は多く春庭の門に入つたが、鈴木朗も亦最先にその門人になつた。鈴木はその雅語音聲考の稿の成つた時に春庭に校閲を乞うてゐる。それは門人としての當然の事であつた。鈴木が、春庭の門人になつたのは享和元年であり、斷續譜の出來たのは享和三年であるとする時は、その校閲を乞うたのは當然のことである。ことに、神宮文庫本にはその校批を某氏に乞うたことが明らかであるのを見れば、師と仰ぐ春庭に之が校閲を乞はなかつたとは斷じていひ得ない譯である。さうすれば、春庭がこれを見ないとはいはれない。八衢の出來たのは文化三年であつて、それより三四年の後である。もとより私は春庭が、斷續譜をとつて自己の著述に用ゐ

て、それらの作用に一定の名目を與へたことも亦本書にはじまるもので、用言の研究はここに到りてはじめて完成した結果をもたらしただけのもので永く後世の典據となつた。

しかしながら、事は創始に屬するものであるから、幾多の缺點もないではない。上にいふ如く「く、し、き」活用「しく、しき」活用についてはただそれが在ると云つただけで、委しく説くことが無く、ラ行變格をあまり軽く見過ぎて四段活用の例語の中で附記するに止め、又一段の「ケル」といふ語は御國詞活用抄にも斷續譜にもあげたけれども、之を採用しなかつたことなど詳細に論ずる時には種々の點で議論の餘地はあるのである。

詞八衢が一たび世に出てから後、天下の人々がはじめて用言の活用の簡單で秩序正しいものであることを得て、國語を學ぶものは必ず八衢を知らねばならぬことになつた。それ故に春庭の生前に二回（文化十三年、文政元年）、歿後四十年程の間に二回（弘化三年、慶應二年）も版を重ね、明治以後も亦重版した程である。さうして又明治十三年には増補標注詞の八衢といふ書二巻も出版せられた。これは清水濱臣の増補したものにも岡本保孝が標注を加へたのを加部嚴夫が校正したものである。さうして、又これが末書も多く出で、甚しいものはその例語の解釋を目的としたものさへあつた。今は繁を厭うが故に

それらの書名は略するが、要するに多くの末書が出たけれど、活用の研究の上に於いて眞に八衢の缺陷を補正したといふべき點のあるものは多くない。それらの點について多少注意すべきものは林國雄の詞の緒環、黒澤翁滿の「言靈のしるべ」と義門の諸著と權田直助の形狀言八衢とであるが、義門と權田との事は後に述ぶることとする。

詞の緒環は二巻の書で、天保七年の序があり、天保九年に出版した。これは上巻に詞の玉緒及び詞の八衢の補正をなすといふ意見があり、下巻はてにを井に歌の事を書いたもので、八衢の末書といふ譯では無いが、その上巻に一段の活用について論ずる所があつて、之を三種に分けて、上一段、中一段、下一段とするがよいといひ、八衢に一段の活用としたものを上一段とし、「來」^ク「爲」^ス「寢」^ヌ「經」^フ「得」^ツを中一段とし、「蹴」^ケ「爲」^セ「經」^ヘ等を下一段とするがよいと論じた。その論ずる所は頗る僻して、とることの出来ないものが多く、その中一段といふものは全く誤であり、又下一段の内容も大かた賛成することの出来ないものであるけれども、八衢に顧みなかつた「ける」を下一段活用としてとりあげたことは賛成してよいことであるから、學者が之を認め、これから後に上一段活、下一段活といふ區別を立つることになつた。

「言靈のしるべ」は上中の二編がある。上編一卷は天保四年に成り、嘉永五年に出版し、中編二巻は安政三年に成り同年に出版した。上編には詞のはたらき、辭のとゝのへ、かなづかひの事をのべ、中編にはてにをはをば三十二類にわけて一々其の義を説いたもので、下編には五十音の事をのべたといふことであるが、それは果して出来たものかどうか明かでない。今ここに説かうとする所は上編の詞のはたらきの條にある。翁満は活用をば

四段 <small>ヨキク</small> の活	四段再 <small>フクビ</small> の活	一段 <small>ヒトキ</small> の活	上二段 <small>カミフクキ</small> の活	下二段 <small>シモ</small> の活	三段 <small>ミキク</small> の活
三行 <small>ミクテ</small> の活	二行 <small>フクテ</small> の活	一行 <small>ヒトクテ</small> の活			

の九種としたものであるが、その八衢と違つた點をいふと、上二段の活といふのは、八衢の中二段の活のことで、彼は

下二段カカに對カへて、中二段と云る理ユトワリなければ、今は上二段に改めつ。

と云つて改めたのである。又三段の活とは八衢の變格のことで、

變格なれば、格にあらず。格あれば變にあらず、されば是を三段の活とはいふなり。といつて改めたのであるが、その語の例を見ると、八衢にカ行の變格としてあげた「來る」とサ行の變格としてあげた「爲る」「おはする」との三の語である。以上、二種の改名は道

理のあることであるから、上二段の名稱は汎く用ゐられ、中二段といふ名稱はすたれた。三段の活の名稱は當時世に用ゐられなかつたが、明治に入つて中根淑の日本文典に之を用ゐた。以上はその採用すべき點であるけれど、その他の名目は世に用ゐられなかつた。ことに三行の活（寒み、さ、く、し、きといふ詞だといふのである）二行の活（正しく、し、き）一行の活（幽カスかなり け、ミ、サ、ク、シキ）の如きは命名はとにかく、活用の研究としては甚しく蕪雜なもので、世人が隨はなかつたのは當然である。而して彼は又奈行變格良行變格を四段活用に合せて何等特別の取扱をしなかつたものである。以上の二書は大きな問題では無いが、活用の名目の由來を心得るには必ず知らねばならぬ事柄である。

春庭の他の著は詞の通路三巻で、文政十一年本居太平の序があるけれど、刊行年月は明かにしてない。この書は用言の研究を施したもので、動詞の自他の別、詞の兼用の事（同言異義の二語を一語であらはし、二義をかねさすること）詞の延約の事實を説いたものである。しかしながら大した成績をあげてゐるとは思はれぬ。要するに春庭の功績は詞の八衢の一部に止まるといはねばならぬが、その一部の詞の八衢は僅かに二冊の小冊子であるけれども、國語學史上、不朽の大研究で、父宣長、富士谷成章と名譽を争はしむるに

足る大著述である

十六 義門より富樫廣蔭、權田直助に至る

鈴木朗によつて総合せられた國語學の主潮と詞八衢によつて一往大成した用言の研究とを、一身に繼承し二者を合一した觀のあるものが僧義門である。

義門は俗姓東條氏、若狭國小濱の妙玄寺（東本願寺の末寺）に生れた人で、文化四年兄の死によつて、その寺の住職になり、天保十四年に五十八歳で歿した人である。この人の國語學には師匠なく、全くの獨學である。その國語學に志した動機はその宗門の假名聖教を研究した際國語の語法に疎かつた爲にその眞意の解しかねたのを憂へ、國語の法格を研究してその宗學の用に供せうといふ事であつたといふ。かやうな譯で、彼は本居流の語法の學問を研究しその結果、その國語學を補正した點が少くないが、それによつて、その宗門の聖教の研究に一生面を開いたといはれてゐる。義門の國語に關する著書は少くない。先づその名目をあげておく。

言葉の八衢疑問 一卷 文化十三年三月成、寫本

指出廻磯 一卷 文化十二年成、天保十四年刊（磯の洲崎と合冊）

活語指南 一卷 文政九年成、天保十一年までは詞の道しるべといひ、天保十二年に

名を改めた。寫本

山口栞 二卷 文政元年成、寫本、後の同名の書と別。

磯の洲崎 一卷 文政三年成、天保十四年刊

友鏡（詞遣友鏡ともいふ）一鋪 文政六年成、天保十三年刊

於乎輕重義 二卷 文政十年成、寫本

三部經和語説 五卷 （原名入言小補、又眞宗聖教和語説、又和語説） 天保三年十一

月より翌年三月までの講述、第一卷明治十一年刊、以下寫本

山口栞 三卷 天保四年成、天保七年刊

玉の緒繰分 五卷 天保二年起稿、天保六年既成、嘉永四年刊

和語説略圖 （原名やちまた友かゝみ略會圖） 一鋪 天保四年成、同十三年刊

奈萬之奈 三卷 天保六年成、天保十三年刊

活語雑話 三卷 第一編天保十年刊、第二編天保十一年刊、第三編天保十三年刊
和語説略圖聞書 一卷 (又名山口栞和語説略圖解、又語辭辨説聞書) 天保十年成、

寫本

活語指南 (原名略圖考證) 二卷 天保十一年成、天保十二年刊

活語餘論 三卷 天保十三年第一卷成、寫本

御文和語説 末代無智章 一卷 天保十三年九月の講述

友鏡底廼影 三冊 天保十二年六月の序あり。

假名遣千よの古道 一冊

義門の研究は多方面にわたつてゐるが、今先づ、語格に關するものを説き、次に音韻に關するものに及び、さて後その他に及ぼすことにする。

義門の國語學に入つた、その最初に研究したものは詞の八衢であつたと思はる。彼は文化十三年三月十九日に八衢の中、數ヶ條の不審に己が意見をそへて、本居健亭(即ち春庭)に質したものが在つて、これが言葉の八衢疑問(紙數二十枚)と題して世に傳つてゐる。かくしてかれの著述の大部分は用言研究に關するものである。一々について今は解説

する違が無いから、重要なものについてだけ述べよう。文政六年に義門は友鏡といふ圖表を出版した。これは本居宣長の紐鏡を訂正増補したものとといふ、宣長はそれを三轉、四十三段に分けたのを、友鏡には五轉、十九類、五十二段とした。さうして義門はその五轉に各名をつけて、

第一轉 第二轉 第三轉 第四轉 第五轉

將然言 連用言 截斷言 連體言 已然言

とし、なほ欄外として「使令」といふ一轉をあげてある。さてこの十九類、五十二段は活用の種類によるものであるから、その説の當否は別として、宣長の紐鏡の缺陷を補正したと見ることが出来るかどうかは一考を要することであるが、その事は後に論ずる。玉緒線分は目録一冊本文四冊のもので天保二年十二月に稿を起し、十二年に成つたものであるが、歿後に出版せられたものである。この書は本居の紐鏡に對する玉の緒の如く、友鏡に對する説明として著されたものであるが、係結についての論よりも活語の説明が多い。

義門の學が進んで世の視聽を動かすに至りては、宗門内でも之を重んじたといふ。彼は天保三年十一月廿三日から翌年六月の頃まで協袋村の法順寺で淨土三部經を講説したが、

それを聴講者の筆記したものが在る。この書は、はじめ入言小補と云つたが、又眞宗聖教和語説とも單に和語説とも云つた。義門は天保四年に和語説略圖といふ表一鋪を著したが、天保十一年に追加する所が在り、之を出版した。これはもと「八ちまた友か、み略會圖」と名づけたものであつたが、人の勧めによつて名を改めたものだといふ。この圖は活語の一覽表で、動詞と形容詞とそれから複語尾の各種類を網羅し、且つ各の活用形を示したものである。それはその原名の示す如く、一方には八衢の表にならひ、他方は友鏡をとり來てあはせたものであるが、友鏡と異なる點は友鏡には紐鏡の術語に隨つて、第何轉といつたのをこれには全く之を省いて、直ちに將然言、連用言等の目をあげ、又彼には三轉の係辭を標したのをこれには全く之を除き、友鏡には「使令」と欄外においたのをこれには希求言といふ欄を設けて加へた。その他に於いては大差のないものである。

義門の活語に關する研究には活語雜話といふものもある。これは三篇あるが、その大部分は諸學者と往復して研究論辯したものを集録したもので参考に資すべき點が少くない。而してその第三編と略同時に刊本の活語指南が出来た。この書はもと義門の友人平井重民が和語説略圖を基として一々之が例證をあげて説明を加へ略圖考證と名づけたものがあ

つて、それを義門に見せた所が、その詳かにして我が意を得たことを喜び、己が前著の活語指南の出版を思ひ止まり、その長所をとり之に補ひそれに活語指南の名を與へたものであるが、その頃上野の人新井守村ニヒサといふ人が和語説略圖の説明をした本を見たいと望んだから之を與へたのを天保十二年に出版したのである。

義門の語格に關する著述は多いが、之を活用語に關するものと、てにをはに關するものとの二に大別することが出来るやうに見ゆる。即ち、友鏡、玉緒繰分、友鏡底迺影の如きものはてにをはの研究に關するものといふことが出来るであらうが、その他はすべて活語の研究に關するものといふことが出来る。然るに、その係結の研究に於いては何等の卓見を見ることが無いのみならず、第一段の係の「ただ」に「て、に、を、と、ど、で、ば」をあてた（略圖）ことの如きは紐鏡の「ただ」の眞意を全く知らないものである。加之、彼が紐鏡に倣つて友鏡をつくつたとはいふが、紐鏡は係結の關係の表であるのに、友鏡は活用の表であるから、その本旨を知らないものといはねばならぬ。隨つて紐鏡に詞の玉緒がついてゐる如くに、友鏡に對して玉の緒繰分を著して、これを以て玉緒の説明の如きものと思はするやうな命名はしたけれど、玉の緒の本旨たる係結に關する説は少くて、

汎く國語學一般にわたつての彼の意見を綜合的に見るべき資料といふべきものである。それ故に、義門の語格上に於ける研究上の功績は主として、活用語に關してのものである。而してその活用語研究をその發展の上から、又體系の上からならべて見れば、友鏡、和語説、略圖、活語指南の三書にあるといふべく、その中にも和語説、略圖はかれの學說の中堅といふべきものである。この和語説、略圖は既に云つたやうに友鏡に端を發したものであるが、その友鏡は果して最初から活用語の爲に著したものであるかといふにさうで無かつたことは既に述べた。彼は紐鏡を訂正増補することを目的として友鏡をあらはしたといふ。さうして本居が三轉だけしかあげなかつたものを増補して五轉にしたのである。しかしながら、これが、紐鏡の増補として適切なものであらうか。紐鏡は元來係結の關係を明かにせうとするのが目的であつたから、三轉で十分なのであつて、係結に關係の無いものを載することは必要が無いのみならず寧ろ蛇足である。それ故に友鏡の五轉といふものは紐鏡の三轉とは同じ立脚地に立つものではないものであつて、紐鏡の精神から見れば、誤解に基づいて蛇足を加へたものであると云つても差支ないものである。義門もこの點について多少氣が附いたものらしく、

此十九類五十二段の圖はてにをはの本すゑを照しあはせん爲はさる物にて又活き動くことばの格をも大かたひと目に見とほしわきまへんれうにもとあらはせる也。とも云つてゐる。それ故に、友鏡は紐鏡の増訂といはばいへ、本質は一種の活用表であるのであつて、これは或はいひ過ぎかも知れないが、義門には紐鏡の精神がわからなかつた爲にひたすら之を不完備と認めてこの企をしたものらしいのである。しかし、この友鏡は紐鏡の増補といふ意味を離れて重大な結果を生じてゐる。

友鏡の特色は紐鏡の三轉を五轉にした點にある。この外に紐鏡の各段を分合した所にも義門の苦心も功勞も見ゆるけれど、それらは要するに紐鏡の範圍内の事である。三轉を五轉にしたことは紐鏡の範圍外に出たことで、友鏡が活用圖に化した點がここに存するのである。しかしながら、どこまでも紐鏡の性質がつきまといつて活用圖として見れば不十分な點があるから、彼はこの友鏡と詞の八衢の圖表とを會通して純然たる活用表を製した。これが和語説、略圖である。この圖と友鏡と異なる點は上に云つた通りであるが、ことに著しいのは五轉の名を除いて直ちに將然言、連用言等としなほ希求言を加へて六種の活用形を立てた點にある。かくして今も用ゐる六種の活用形といふ範疇は命名に多少の差がある

けれど、ここに義門によりて創められたものである。なほその他の點で、友鏡と略圖との差異をいへば、友鏡には各段に統括した名の無かつたのを詞八衢によつて、活用の名を加へたこと等である。要するにこの和語説略圖は經の方面は詞の八衢を繼承し、緯の方面には紐鏡を繼承したものとすべきであるが、しかし、その研究の眼目たる五轉は紐鏡から直ちに生れて來る筈のものではなく、詞の八衢の影響もあるではあらうが、かやうに活用形の範疇を明確に立つることは八衢には無い所であるからこの點は紐鏡の影響でも無く、八衢の影響でも無い。この五轉の名目のつけ方については活語雜話第二編三十六條活用五轉のすべての論の中に説く所があるが、それによれば、その命名の由來は多少わかるけれど、この五轉をとりだした事については語る所が無い。然らばこれは全く義門の獨創で、先人にその源を求むることが出來ぬかといふに、必ずしも然らずである。私を見る所を以てすれば、かやうに活用形の範疇を立つることは既にいふ通り、富士谷成章の裝圖に端を發し、鈴木朗の活語斷續譜が之を繼承取捨したものである。今斷續譜の七段と義門の六の範疇とを比較すると次の通りである。

和語説略圖	飽	活語斷續譜	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段	第七段
截斷言	ク	本語ニテ ルキレスワ							
連體言	ク	下ノ詞ニ ツミク							
連用言	キ	下ノ詞ニ 並ベ連ヌ							
已然言	ケ	現在ニテ クバニツミ							
希求言	ケ	オホスル コトバル							
將然言	カ	未來ニテ クバニツミ							

これを範疇の數からいへば、斷續譜の第三段を略圖に省いただけの事である。これはいつでも、第一段と同じ形であらはるものであるから省くことは當を得てゐる。その他はその範疇の位置を八衢の排列の順序におきかへただけの事である。一々の範疇に名をつけたことは義門の獨創であるが、斷續譜の説明の語と比ぶれば、その間に一脈の生氣が加はうてゐることも知らるる。抑も用言の活用をそこできると下にづくるとによつて區別を立て、それを以て、識別の原理として研究したのは鈴木朗をはじめとする。義門が活語斷續譜を見てゐたといふ記事は無いけれど、言語四種論を見てそれによつたことは和語説略圖にも玉の緒線分にも明かに證據がある。それ程であるから、言語四種論の中にそ

の名の見ゆる斷續譜を見なかつたとは斷言出來ないことであるのみならず、義門が好んで用ゐる活語といふ名目は誰が用ゐはじめたものであるかを考へて見る必要がある。活語といふ語は今日まで知られた文獻では活語斷續譜をはじめとするのみならず、義門以前にはこれが唯一のものであつたらう。義門がこれを知らずして獨創的に用ゐだしたとは考へられないのである。かやうに考へてくると、かの柳園叢書本の斷續譜に義門の略圖の名目を記入したものは後人のわざであるに相違ない。而してそれに「使令」といふ名目を記入しながら友鏡といはずして「和語説略圖ノ」と記せるものも亦、よく實物を知らない輩のしわざと思はるるのである。

以上の外義門が用言の研究の上に残した功績は範圍が頗る廣いけれど、斷片的のもので、その最大の功績はこの活用形の範疇を立てたことに存する。この六の範疇は永く活用研究の教條となつて確立したのであるが、その名目には後に多少の變更を加へた。即ち、その將然言は詞の玉橋（後にいふ）によつて未然段といはれたのにより、截斷言は黒川真頼の詞の栞打聽（明治二十三年刊）によつて終止言といはれたのにより、希求言は明治時代の西洋模倣文典に命令法といつたのにより、かくして未然、連用、終止、連體、已然、命令

といふ名目にかはつたけれども、本旨は別にかへられたものではない。義門の用言の研究の上に跡を残したことの他のものは彼の詞の八衢に於いて閑却した「有り」「居り」を一類として活用表のうちにとり入れたこともかぞへらるるが、これには名目を與へなかつた。その次には形容詞の研究に力を注いだことで、山口栞三卷のうち、下卷一冊を殆ど全くこれが研究に費して闡明した點の少くないことも注目すべきことである。

義門の音韻に關する功績は主として本居宣長の研究の補訂に屬するものである。それは於乎輕重義と奈萬之奈との二著がある。於乎輕重義は二卷で、文政十年閏三月に出來た。本居宣長が彼の於乎所屬辨を著して於と乎との所屬を明かにして鎌倉時代以來の五十音圖の誤りを正したことは既に述べた通りであるが、義門はその論證が未だ不完全だと云つてこの書を著したのである。これについては義門は二の方法をとり、第一に證據をあげ、第二に疑難を解くといつた。その證據としては宣長が古書、古音、悉曇の三類八證をあげたのに對して義門は二十箇條の證をあげて論じた。これが上卷である。第二には二個の難問をあげてそれに對して詳細に答へ、次に上卷の二十個條の證に對しての間答をたして之を辨へた。宣長の卓見は之によつていよゝ明かになり、確乎不動のものとなつた。男信は

上野國利根郡の郷名に「男信」と書いて「奈萬之奈」とよむものがあるのを研究の手初めとして、漢字の韻の撥ぬる音に「む」(m)「ん」(n)の區別があるといふことを論證したもので、關政方の備字例と共に本居の地名字音轉用例の補訂として著しいものである。以上の二書も亦本邦の音韻學史上不朽の大著である。要するに、義門の研究は活用語と音韻との上に在つて、いづれも國語學史上不朽の功績を止めたものである。

わが用言の研究は上述の如く漸次に進歩發展し、義門が出てからはその個々の語の活用の研究はもとより用言を總括的に研究した點も亦よく行き届いて補訂の餘地頗る少くなつた觀がある。然しながら形狀言は詞八衢以來とかく等閑に附せられ、義門に至つて稍重く取扱はれたやうだけれど、また研究が不十分であつた。これらの缺點は權田直助の形狀言八衢によつてはじめて補はれた。私はここにその權田直助に至るまでの研究を次に引つづいて見ようとする。

義門以後は國語學史上さまでの大人物が無い。そのうちさしつぎに稍注目すべきものは富樫廣蔭である。この人は和歌山の出身で、はじめ本居太平に就いて學び、後に松坂に赴いて春庭の門人となつて學んだ人で、明治六年伊勢桑名で八十一歳で歿した。この人は著

述は頗る多く國語學に關するものも少くない。そのうち、國語學史上、後世に影響を及ぼしたものは辭玉櫛と詞の玉橋との二書である。

辭玉櫛の目的はその書名に

詞八衢捷徑
詞玉緒總括 辭玉櫛

と記した如く、詞八衢と詞玉緒との要領を一括して捷覽に使せうとするにあつた。而して先づ音韻出生順次圖といふもの即ちウオアエイの順序によつた一種の五十音圖をあげ、次に普通の五十音圖を、五十連音韻分成形狀圖と名づけてあげ、次に各用言及び複語尾をば自己一流の命名に基づいて作つた圖表であげ、次に動靜辭繫樣概略圖といふものをあげたが、この圖表は要するに、用言と複語尾又は助詞との承接の關係を表示したものである。而して著者一流の語法上の見解は詞の玉橋に述べてあるのである。

廣蔭がはじめ國語學に關して著したものは詞八衢捷徑と名づくる書で、これが後の詞の玉橋の第一卷の原本であるといふ。玉橋はその著述目錄には七卷とあるけれども、現に傳はつてゐるのは二卷に止まつてゐる。この書は自筆本の卷末には「文政九年十一月稿、天保四年二月四日改寫、弘化三年二月廿五日再改寫」とあるが、淨寫した本に更に頭書を少

からず加へてある。この書は玉禪にあげた各種の要項を説くことは、紐鏡と玉緒との関係のやうになつてゐるものであるが、しかし、それだけではなくて、語の分類からはじめて語法全般に互つて記述したもので一種の文典と稱へてもよいものである。而してその研究の成績如何と見れば、術語の上に盛んに新たなものを加へた以外に、独自の發見と見るべきものが殆どなく、從來の諸學者の研究を綜合して組織したと見るべきものである。

この書は上の如く創見といふものが殆ど無い。しかし、強ひてこの書の特徴を求むる時は語の分類にあるとでもいはねばなるまい。この書には國語の單語をば、言、詞、辭の三種に分け、言即ち體言をば、先づその性質によつて、

形言 (有形のものの形をさす體言)

様言 (無形のものの様をさす體言)

の二種に分け、又其の成立の上から見て

居言 (用言の連用形を以てした體言)

略言 (用言の語幹を以てした體言)

合言 (二以上の語を合せて作つた體言)

の三種に分ち、合せて五種あるとした。次に詞即ち用言をば、活用によつて

四韵詞 (四段活)

一韵詞 (一段活)

伊字韵詞 (中二段活)

衣字韵詞 (下二段活)

變格詞 一、來

二、爲、おはす

三、去、死

四、有、居、欲、侍、然

音雜詞 (久活、計久活)

の六種とし、性質によつて大別して

説動用詞 (今の動詞)

四韵詞 一韵詞 伊字韵詞 衣字韵詞 變格詞

説容體詞 (今の形容詞)

音雜詞

の二種とした。又その辭は

靜辭スレテニラハ (今の助詞) (これを二種に小別した)

動辭ウキテニラハ (陳述に關する複語尾) (これを三種に小別した)

の二種に大別し、更にこまかく分けた。而して以上で、分類は盡きたのかといふと、廣蔭は別に屬詞タケヒコトバといふものを説いてゐる。それは

屬詞は本來一ツ詞ニハアラデ、詞ノ下ニ動辭又他詞ホカノ加リテ一ツ詞ノ如クナレル云々と云つてゐるが、その例としてあげたものは複語尾の「さす」「す」「らる」「る」と形容存在詞の「よかり」の類、動作存在詞の「かけり」の類をあげてゐる。さて又その詞即ち用言の活用形にはそれ／＼命名してゐるが、それは辭玉襷には

未然段 續詞段 現然段 續言段 已然段 仰オホセ

の六の名目にしたが、玉橋には現然段を斷止段と改めた。これらは和語説略圖に基づいて、その名稱をかへただけの事である。

以上、この人のした所を見ると、その語の分類の上に、又活用の種類の上、又活用形の

名目の上に、それ／＼一流の目先のかはつた名稱をこしらへてつけたといふ程の事で、何等内容上の重大問題、國語の實質上の大問題に觸れてゐるものは無い。加之、その説く所には首肯しかねる點も少くない。たとへば「かかりむすびの事」に於いて係辭といふことを全く知らないで、濫りに之を改めて後人を誤り導いてゐる。又かの言、詞、辭の三種別を以て一切の國語を分類したほせたやうに玉橋には言つてゐるけれども、かの舊來虛詞といひ、富士谷が「かざし」といつた一類はどこにもかぞへて入れてゐない。本書はかくの如く内容の上から見てとるべき點が無いのである。しかるに、これが出てから後は、殆ど一世を風靡してその學を奉ずると否にかかはらず、これらの説を信ずるものが多くなつて明治時代に及んでもなかくその風がやまなかつた。どうしてさやうな勢力を得たかと考ふるに、從來の國語學者の説く所は大抵その局部に偏して國語全般にわたつて網羅集成したものが無かつたところに、本書が恰もその缺陷を満した觀が在つたからによるものであらう。そも／＼わが國語學は契沖以來分科的に研究をして來たものである。それが富士谷成章によりて総合的研究の端緒をつけたが、その後繼者が無くて再び分科的のものとなり、鈴木朗に至つて又総合的になりかけたが、それは未成品で終り、義門の玉緒線分に

もこの総合的機運が見らるるけれど、義門はさやうな事に適する人で無かつたと見えて、まともりがつかずに終つた。今この玉橋はその學說上の創見といふものが無いけれども、この総合の上にはとにかく一往の結果を示した。これは機運に乗じたものであらうが、しかし、又これをよくしたのは廣蔭その人の力に基づくものである。

かくて、これより後は、世の國語學者は多く範をこれにとることになり、それが爲にこの書の分類をも踏襲するに至らしめた。而して近時、動詞形容詞の區別をなして、「在り」の分類を一切動詞に收むることになつてゐるが、これは從來無かつた所である。これは玉橋の説動用詞に變格詞を收めたそのままを以て動詞とした爲に生じた現象に基づくものである。かやうにして明治時代に舊派の國語學と目せらるるものは實はこの廣蔭の學をさしたものであり、それに反對するやうな人でもやはり、その影響をうけてゐるのである。要するに、廣蔭は研究の上から見れば、實質上、國語學に貢獻する所を殆ど見ないけれども、後の學界に影響する所の大なる點より見れば、注目を要する歴史上の人物であるといはねばならぬ。

明治時代に入つて、詞の玉橋の説を世に布いたものの第一人者は堀秀成である。秀成は

もと下總古河の藩士であつたが、天保十四年國學に志して藩を退いて、爾來七年間諸家に就いて學んだといふが、直接に廣蔭に就いて學んだかどうか明かでない。それから後諸國に遊歴して學を講じた。明治三年には宣教少博士に任ぜられ、後辭したが、明治十年には學習院開院の時皇太后宮の御前に皇國語法を講じ奉つたこともある。英國公使館員アーネスト、サトウが、秀成について國語の事を問うた事も在つた。明治二十年に年六十七で讃岐高松で歿した。秀成は著書が頗る多く、その範圍も多端であるが、國語學に關するものが特に多い。その國語學に關するものは大別して音義に關するものと語格に關するものと二にすることが出来る。その音義に關するものは廣蔭その他の人々の所謂言靈説を敷衍したものであるが、これは一種の神祕説ともいふべき傾向のあるもので、純正の國語學と見るべき部分が少いからここにいはない。純正に國語學に屬する著書も少くないが、

日本語格全圖 一卷 明治十年六月刊

ヒカケノカッラ 蘿 一名語格全圖解 二卷 安政四年成寫本

日本語學階梯附言語八種考 二卷 明治十年六月刊

を代表的のものと見るべきであらう。これらの著は詞の玉橋を殆どそのまま繼承したもの

と云てもよいもので、たゞ少しく異なるところは玉橋に四韻詞などむつかしい名にしたのをわかりよくした點にある。それも全く八衢の舊に復したのでなく、次の如くにしたのである。

四段ノ活詞 一段ノ活詞 上二段ノ活詞 下二段ノ活詞 別格ノ活詞（全圖では變格詞）志支久ノ活詞

なほ玉橋に詞を説動用詞、説容態詞の二種にしたが、ここにはその區別を立てない。なほその他には様言の附屬として係言カカリゴトといふものを説いてゐる。これは本居のいふ係辭では無く、所謂副詞接續詞の類を云つたのであるが、徹底した説では無い。

秀成の説は大體に於いて廣蔭の説を繼承敷衍したもので、それ以上には創見といふものも無い。しかし、秀成は足跡の到る所、九州は知らないが、各地に及び北海道にまで及んでゐる。さうして到る所でこれを講じたのであるから、その説を聞いた人が甚だ多かつたのみならず、上は皇室に進講し、外は外國人にも教へたりなどしたから、明治の初期に於いての國語學は殆どこの人によつて代表せられた様な觀を呈した。後に舊派の國語學とはかやうなものであると目せられたものはこの廣蔭、秀成の學問であつたのであるが、これ

は寧ろ不完全な新派といふべきものであつた。而して、その説がかくの如く勢力を得るに到つたのは秀成の力であつたと思はるる。

掘秀成と相並んでこれらの説を繼承した人として著しいのは權田直助である。直助は武藏國入間郡毛呂本郷に生れた人で、家は世々醫を業とした。はじめ、醫を學んだが、後に平田篤胤の門に入つてその道の師表と仰がれた人である。明治二十年六月に相模國大山大で歿した。年七十九歳である。この人は秀成よりも先輩であるけれども、語學は於いては後に著手したもので、明治四年に國事によつて嫌疑をうけ、一時幽閉せられてから後、専らこの學に力を致したものであるといふ。而してその語學に於いては直接に師承したところは無いと思はるる。その著述は多くあるし、國語學に關するものも少くない。その主要なものをあぐると、

- 詞の眞澄鏡 一鋪
 - 詞の經緯圖 一鋪
 - 詞の眞澄鏡 一卷
 - 詞の經緯圖 一卷
 - 語學自在 二卷
- （明治四年成七年刊、明治八年再訂、同十二年再訂増補）
（明治十年成、明治二十七年刊）

國文句讀考 一卷 (明治二十年刊)

國文學柱 二卷 (刊本)

漢文和讀例 一卷 (明治三十六年刊)

形狀言八衢 三冊又は二冊とす (寫本)

等である。このうち直助の國語學の組織を見るべきものは先にしては「詞の眞澄鏡」「詞の經緯圖」及びその解であり、後にしては「語學自在」である。その説は大體富樫廣蔭の亞流と認むべきもので、直接に「詞の八衢捷徑」(玉橋卷一の原の名)から受けた點もあり、又鈴木重胤の詞の捷徑(これは富樫廣蔭の説に基づいて、多少の意見を加へたものである)落合直澄の活語大成圖(これも略似た徑路をとつたものである)に従つた點もあつて、この一流の大成者と云つてもよいやうに思はる。直助の説は、かの廣蔭の用ゐた言、詞、辭といふ名目を改めて、體言、用言、助辭と名づけ、用言を作用言、形狀言の二に分くるといふやうに、世人にわかり易い名目に改めたといふやうな點がすぐれてゐる。しかし、それらは名目の上だけの事ですほどほむべきことでも無い。直助が行つた事でわが國語學史上重大な點はこの分類の上にも存する。それは用言を大別して作用言、形狀言の二とし

たその場合に形狀言の中に良行四段一格と久志幾活との二種を含めたことである。ここに良行四段一格と云ふのは所謂良行變格のことで「アリ」といふ語の二類をさすのである。このやうに「アリ」の二類を形狀言としたことは富樫などと著しく異なる點で、この二類は富樫が作用言の類に入れてから鈴木重胤も堀秀成もみなそれに盲從したのに權田は富樫の説を繼承しながら、それに盲從せず、遠く富士谷成章の裝の説に基づき、それよりも一步を轉じて鈴木朗の言語四種論の説に立ちかへつたもので、論理の徹底したものである。かやうにして、その説は體言、用言、助辭三分説の弱點等を除けば、從來の語學説の長所を集大成した觀があつて、その術語も奇を衒はずして見地の穩健なことを表示してゐる。それ故に、舊派の國語學の大成者と目すべきものはこの權田直助であるといふのが適當であらう。

權田直助は上の如き地歩をわが國語學史の上に占むるものであるが、この人の國語學史の上に重きをなす點は上の點よりも形狀言の研究にあるのである。直助の形狀言についての考は、上にあげたやうに形狀言として彼が良行四段一格と久志幾活との二種をあげたことで既に明かであるが、卒然としてこれに向つた人は或はこれを平凡な事と見るかも知れ

ないから、ここに一言注意を加へてみよう。良行四段一格のことは既に述べたから今更いふまでも無い。その他の一を「久志幾活」としたことが、この直助の國語學史上の偉大な位置を標示するものである。これについては從來の形狀言の研究の有様から觀察してこなければならぬ。

詞の八衢が「くしき活」「しくしき活」に關して委しい説をあげなかつたのが原因になつたかどうか明かにはわからぬが、とにかく、それから後の用言の研究は多くはこの方面に疎略であつた。義門がその寫本活語指南に於いて特に之を委しくのべ、又山口栞に於いて三卷中の一卷の最大部分をこれが爲に費したことなどは、この一類の語の爲に盡したものともしふべきであらうが、しかし、決して十分とはいはれない。而してこれらは裝圖に「芝狀」「鋪狀」としたことからはじめて、八衢には二種としたし、八衢以後の説では、たとへば、「言靈のしるべ」に「寒、暑、赤、白」等は三行活であつて

み さ く し き

と活用するもの、「正、奇、嬉、悲」等は二行活であつて、

しく し き

と活用するなど云つたりして（その他にもあるが略する）それらの説は頗る不純であつた。山口栞にはこれらについて「く、し、き」活「しく、し、しき」活の二種に止まるものとして、從來の不純無雜な點を除き去つたことは大に徳とすべきものである。しかし、義門の後にも必ずしも義門の説の如く一定しないので、廣蔭は久活計久活の二種として「シク活」を立てないし、詞の捷徑は「久活」「志久活」「計久活」の三種を立てたりした。かやうな有様であつた際に權田直助の形狀言八衢が出て從來の僻説を破つて、はじめて形狀言の活用の真相を發揮したのである。この書は寫傳本のみで、或は二卷とし（東京音楽學校藏本）或は三卷としてある。（無窮會藏本）この書は詞の八衢に「くしき」活用等の語について委しい説明の缺け、その他には説が少くないけれど、定説が無くて形狀言の真相が明かでないからそれらの缺點を補はうとしてこれについて深く研究したものであるが、今はその「あり」の一類についてはここにいふことをしない。その「くしき」活「しくしき」活と普通にいふ所のものについて從來それらを二種或は數種の活用とした説を破つて、形狀言の根元は「くしき」活用一種に止まる旨を明かにし、その所謂「しくしき」活用に於いて終止形に「しし」といはないのは同音の重なることをきらつて省いたに止まるといふこ

とを明かにした。これは語幹と語尾とを明かに識別したことから導かるる當然の歸結といふべきものであるけれども、從來一人もこれに心づかなかつたものを看破し論定したもので、用言の研究史上重んずべきものである。もとよりその説は未だ完全といはれないもので多少の缺陷もある。たとへば、この形状言の「くしき」活にも請即ち命令形を立てて、「多かれ」といふやうな形をこれにあてたのは、形状言と私のいふ形容存在詞とを混同したものであるのみならず、形状言の本質が超時間的の用言で、命令形の如く時間的變化を豫期する如き性質を有するものでなくて、これに命令形のないといふことが、その本質の眞相をあらはしてゐるものであるといふことを知らなかつた點から起つた誤謬であると評するより外にいひやうも無い。

要するに、權田直助の説は多少の缺點は無いではないが、舊派の國語學の穩健な大成者と目すべきものであり、その形状言の研究に於いて空前の大研究を施してその眞相を明かにし、以てわが國語學の上に一の貢獻をしたことは永く忘られないことであらう。

十七 鶴峯戊申より中根淑、大槻文彦に至る

寛永年中幕府が西洋の書の講讀を禁じてから、百年を経、將軍吉宗の時、西洋の書をよむことを許してから、和蘭の文章、書籍をよむことが起り、之を蘭學と名づけたが、次いで、英吉利、佛蘭西の語學も亦起るやうになり、幕府の末造には外國語を研究することが一般の風となり、終にわが國語を律するに西洋文典の法式を以てするものがあらはれた。そのはじめをなしたものは鶴峯戊申の語學新書である。

戊申は豊後國臼杵の人で、文化元年、年十七の時に京都に出で、和歌及び曆算の術を學んだ。文化十三年に大阪に下つて諸生に教授し、四十五歳の時江戸に出で、安政三年に水戸藩士に列し、安政六年に七十二歳で歿した。その學は語學、歴史、天文、曆算にわたり著述も亦甚だ多いのである。語學の上の著述も頗る多く、蘭字通、蘭字捷徑、悉曇字母新釋、梵語新釋、助字用格、助字頌、神代文字考、鏗木文字考、増補假名遣、詞鏡等さまざまであるが、ここには専ら語學新書について説くことにする。

語學新書は二卷の書で、天保二年の自序、天保四年の小山田與清等の序文がある。刊行年月は明かでないが、天保四年の出版であらうか。これはもと文政十三年に語學究理九品九格總括圖式といふものを出版した、その圖式の説明ともいふべきものであつて、九品九

格といふことを唱へて國語の法則を説明せうと企てたものであるが、その範疇は殆ど全く和蘭文典の模倣と云ふべきものである。それ故に、この範疇の基づく所を一往顧みてみよ

和蘭語の學習ははじめて青木昆陽の學んだ當初は文法の研究までに手がのびなかつたが、その學の漸く盛んになるに及んではその文法にも研究を及ぼすに至ることは必至の勢であるといはねばならぬ。その文法を専ら記述した本邦人の著は志筑忠雄の和蘭詞品考であらう。これは寫本で傳はり十數枚のもので術語も和蘭語の直譯で、極めて概略に止まるものである。次いで世に出たのは京都の人藤林泰介の和蘭語法解である、これは三卷の書で、文化九年に京都で出版せられたものである。次いで文化十一年に長崎の人羽栗費といふ人が六格前篇といふ和蘭文法書を著した。これは三卷の本で寫本である。又同じ年に長崎の人馬場佐十郎といふ人が訂正蘭語九品集といふもの一冊を著した。これはそれより前に何人が作った蘭語九品集といふ寫本のあつたのを訂正したものであるといふが、これも寫本である。文化十三年には仙臺の大槻玄幹が蘭學凡といふ三卷の書を著した。これは和蘭語の文法書として完備したものと稱せらるるが、やはり寫本である。語學新書は以上の諸

書に次いで出たもので、それらから影響を受けたと考へねばならぬものであるが、和蘭語法解だけが刊本で他はすべて寫本で傳はつたものであるから、鶴峯が特別の緣故によつてそれらの書を傳へない限り容易に見られなかつたものと思はるる。

語學新書はもと「詞の品定」と名づけて、九品に九卷をあて、九格に九卷、附録二卷すべて二十卷であつたのを節略して二卷とし、名も改めたのだとその序説に説いてゐる。而して「蘭に十品四格あり」といひ、鶴峯が皇國、漢土、梵、蘭の諸家を折中し、論定して九品九格としたと云つてゐる。その九品といふのは蘭語九品集などいふ書名でもわかる通り、和蘭語の文法書にいふ所に基づくことは明かであるし、和蘭語法解には「言辭ヲ分テ九等トス」と云つてゐるのでもわかるやうに和蘭語法に據つたと思はるるが、しかし、その實際は必ずしも一致しないのである。今それを比較すると次の通りである。

語學新書 語法解

九品集

(今の譯語)

性言

發聲詞

(冠詞)

(實體言)

(自立名言)

名言

(實靜詞)

靜詞

(名詞)

(虛體言)

(附屬名言)

(虛靜詞)

代名言	代言	代名詞	(代名詞)
活用言	活言	動詞	(動詞)
連體言	分言	動靜詞	(分詞)
形容言	添言	形動詞	(副詞)
接續言	接言	連屬詞	(接續詞)
指示言	上言	所在詞	(前置詞)
感動言	感言	歎息詞	(間投詞)

これらを見ると、いづれにしても當時の和蘭語法は九品詞に分けたものであることは明かである。然らば、語學新書は全くこれによつたかといふにさうではない。今、若し、直譯的にあつるとするはその語法解の性言即ち冠詞はわが國語にないから除かねばならず、上言即ち前置詞と名づくべきものが國語にないから、これも除かねばならぬ。かやうにすれば九品はそのまま該當するいはれないものである。そこで、かれはこの上言即ち前置詞のかはりにわが助詞のやうなものをあてはめて之を指示言と名づけ、名言、即ち名詞の小區分である自立名言附屬名言の二をとり立てて、二の品詞として強ひてその九品の數にあ

はせたものである。それ故に鶴峯の九品は和蘭語法の見れば、筋の通らないものであつたらう。さて、その鶴峯の用ゐた九品の名目は「代名言」「活用言」「活言」「接續言」「接言」「感動言」「感言」のやうに和蘭語法解の名目に基づいてその二字を三字にしたものがあり、又連體言のやうに従來用ゐたものをとつたものがあり、又實體言、虚體言、形容言の如く新たに作つたものもある。さてその九品は果して國語の實際に當つてゐるかといふに、その實體言は今の名詞にあたり、活用言は今の動詞にあたるといつてよいやうに見ゆるけれど、國語では活用を有するものは動詞に限らない。又連體言といふのは彼の所謂分詞の直譯であらうが、わが國語ではそれは動詞の用法の一現象にすぎないのでこれを一の品詞とするのは不合理である。又虚體言といふものは今の所謂形容詞であるが、彼にあつては名詞と同じ法格に立つものであるから問題ではなからうが、これを體言とすることは不條理である。又形容言といふのは今の所謂副詞であつてその命名は必ずしも不可とはいはれないが、その八類十八等の中にあげた例を見れば、雜駁甚しいものである。一例をいへば

「かつ」「遂に」「よく」「深く」「間なく」「もしも」「見よと咲く」の「と」

「霜のおく」の「の」「すらも」「よりさき」「一日もなし」「理りありや」「いさ
知らず」「ならねば」

の如きもので、話にならない程のものである。接續言に於いても同様で、それを十二等に
分けて示してゐるが、それも

「と」「に」「とも」「ども」「よりは」「とは」「また」「はた」「すなはち」「た
とひ」「より外」「さらば」「もしあらば」「願くは」

の如く雑駁なものである。指示言としたものが又

「の外」「の上」「が下」「まに」「中に」「後を」
の如きものであり、感動言に於いても

「あなう」「かなしな」「あちきなや」「あは」「か」「かな」「かも」「が」「が
な」「がも」

の如くさまざまのものを一括したものである。かやうにそれらの内容が雑駁であつて、國
語の實地の分類としては何等の條理も見出すことが出来ないのみならず、その分類の根據
も何も示しては居ないものであつて、ただ、九品といふものにあつるやうに強ひて試みた

といふより外に評の下しやうの無いものである。次にその九格とは何をさすかといふに、
體言助辭六格と用言助辭三格といふものを併せて云つたものである。その體言助辭六格と
いふは能主格（主格）所生格（生格）所興格（興格）所役格（役格）所奪格（奪格）呼召
格（呼格）と名づくものであるが、これは和蘭語法解にいふ所の六格（上の括弧内に示し
たもの）の名目の二字を三字にしただけのものである。而してそれについての鶴峯の説が
果して當を得たかを見ると、先づ、體言といふことの説明も無いが、それを姑く問はない
こととして、その能主格といふものを見ると、

能主格をわかつて三等とす。第一、波、毛。第二、叙、乃、也、加。第三許曾。しな
ことにおのゝ結辭あり。

といふ如きものである。これは本居の係辭を以て主格をさすものとしたもので、主格の意
味も係辭の意味も知らないもので全然不當の事である。さうして今日まで「は」を主格助
詞であるとあやらませ禍源がここにあるのである。次に所生格を「の」「が」としたが、こ
れは稍中つてゐるとすべきである。その他の格は詳説しないが、一部分は當つてゐる點も
あるが全般的には當らないのである。次に用言助辭三格といふのは現在格、過去格、未來

語の三であるが、これは語法解にいふ所の活用三世に倣つたものであらう。ここにいふ所の用言といふものは何をさすかといふに、圖式によるとそれは活用言について言つたものであるが、その三格なるものは活用をこの三格にわけたに止まるもので、その説錯雜して條理が無いのみならず、從來の研究に活用を六の範疇によつて正確に示して來たものを三格にしてしまふのはまさに文化の逆轉であつて、開きなほつて、評する程の價值も無い事である。

要するに、鶴峯の企は國語學史上破天荒の試みとして注目すべきものではあるが、その説く所は和蘭文法を無理に模倣しただけのもので、國語の學問としては全く失敗に終つたものである。ただ彼によつてわれわれが教へられたことは漫然外國文法を直譯的に國語にあてても何にもならずしてかへつて國語の智識を混亂さするものだといふ反對の教訓と、しかし又外國語の研究には國語と違つた見地があるものだといふ他山の石としての刺戟を與へたこととである。鶴峯の與へた効果は上の如く消極的のものであり、又害毒を今日にも流して居るが、しかし西洋風の品詞別をなすこと、語の位格を考ふること等がこれからわが國語學の間に起つたのであるし、その九品の名目中、代名詞、形容詞、接續詞、感動

言といふものは「言」といふことばを「詞」にかへ、又その内容實質の上に變更も行はれたけれども、今も用ゐられてゐる名目であるから、彼れの影響が全く無いとはいひ得ないのである。

鶴峯の失敗してから後暫くは西洋文典の模倣に出た國語學の書は出なかつたが、明治維新の後、世の中がやゝ靜かになると、ここに新に西洋文典を模倣したものが、續々と出て來た。それらの書は語學新書と必ずしも同一にいふことが出來ない。その第一は、この明治以後のものは主として英文典の模倣に出でたことである。もとよりそれら英文典の譯語も和蘭文典の術語から系統を引いてゐるであらうけれど、英文典の譯語として用ゐたものから直接にとつたことは明かである。明治四年に大阪で出版した中金正衡の大倭語學手引草といふ書が、明治以後最初に出た西洋風の文法書であるらしい。この書は二卷あつて、上卷には五十音の圖、紐鏡、詞八衢等を引いて舊來の國語學の大綱をあげ、下卷は西洋文典の直譯流の文法を説いたもので、その品詞は

實名詞、 形容詞、 代名詞、 動詞、 分詞、 副詞、 接續詞、 感嘆詞

の八をあげてゐる。これは語學新書の九品のうち指示言を除いて、その他は名稱をかへた

だけのものであるが、その名稱はその頃既にかやうにあらためられて居て、この本のはじめたものでないといふことは安政三年に出版した和蘭文典字類、慶應二年に出版した英吉利文典字類を見ても知らるる。これらの字類に見ゆる文典上の術語は現今の八品詞の名目と大體同じであつて、上の手引草と差のある所は前置詞をこれには除き、歎息詞と云つたのを感嘆詞としただけのことである。それから後明治六年に黒川眞頼の皇國文典初學（二卷）が出版せられた。さういふやうに續々直譯流の日本文典が出たが、それらの中で、先づ重きをなすのは田中義廉の小學日本文典（三卷）であらう。これは明治七年の出版らしいが、卷一を第一編總論として、字學、假名用格、音便、言語の種類を説き、卷二卷三は第二編上下として、詞學の總論及び各論を説いた。本書の特色は第二編にあつて、ここに西洋文典によつた國語の文法を説いた。これには國語の品詞をば、

名詞、 形容詞、 代名詞、 動詞、 副詞、 接續詞、 感詞

の七にした。この順序を見ると手引草の八品の順序によつて、分詞を除いたものであることがわかる。これには分詞を除いたといふ一の進歩はあるけれど、まだ／＼多くの弱點があつてして國語の本性に適切であるとはいはれない。たとへば、ここにいふ形容詞は西

洋語の形容詞 (adjective) の直譯で「暖ノ春」「大ナル家」のやうなもの、すべて體言を修飾するもの一切をさしてゐるから、國語としては譯の分らないものである。さうして、又一方に於いて今いふ形容詞の連用形を以て副詞とし、その連體形を形容詞とし、その終止形については何と取扱ふかといふこともいはない。而して助詞は各品詞の附屬物として分散せしめてゐる。以上はその大きな缺陷一二をあげたのであるが、要するに、この企ても亦明かに失敗に歸したものである。同じ年に出版した藤澤親之の日本消息文典といふものがある。これは往復文の體にした問答體で日本文法を説いたものであるが、やはり、國語を西洋文法の法式に強ひてあてはめようとしたもので内容から見れば、失敗したものであるが、この品詞の名目と順序とは

實名詞、 代名詞、 形容詞、 動詞、 副詞、 後置詞、 接續詞、 投間詞

となつてゐる。ここに代名詞と形容詞と位置をかへたこと、後置詞を設けた點は小學日本文典とちがふのであるが、助詞を後置詞としてここに一の品詞と認めた點は一の進歩と見ねばならぬものである。

明治九年三月に中根淑の日本文典が出版せられた。これは二冊あつて、まづ、文典前論

といふを置いて、國語に關する汎論をなし、次に文字論、言語論、文章論、音調論と次第し、附録として附々假名、送り假名法則の二を加へたものである。この書は文典として組織の完備した状を呈したもので、明治二十年頃までは盛んに行はれ、世に與へた影響は少く無かつた。この書の品詞は日本消息文典と殆ど一致したものであるが、ただ、後置詞の名を後詞とし、投間詞の名を感歎詞とした點がちがふ。これは日本消息文典よりも稍進歩した點があるけれど、やはり失敗したものである。たとへば、わが「くしき」活用の各活用形を分解して、その連用形を副詞とし、連體形を形容詞とし、終止形を動詞としたといふやうなことがそれである。ただ、この終止形を以て動詞と認めたといふことは形容詞が用言であつて、動詞と性質を同じくするといふことをおぼろげながら認めたと評せねばならぬから、その點は先づよいといはねばならぬが、それでも、それらの活用形を三の品詞にわくるといふことは不條理である。中根は又同年八月に日本小文典二冊を出版した。これは日本文典の要を摘出したものである。明治十年に田中義廉が日本小文典一卷を著した。これは小學日本文典の略説と看做してよいとその凡例に言つてゐるけれど、その品詞に後詞を加へて助詞を認めてゐる點が違ふし、その上に終に文章學を加へてゐる。これらの事

はその名目と共に中根淑の説に影響せられたものと見らるる。

以上、鶴峯申中根淑に至るまで、西洋文法を國語の上に加へようとする企てはいづれも失敗したのであるが、しかし、失敗とはいひながら、徐々に進歩して漸次に、國語の法則と西洋語の法則との間に存する異同を認識せしめ、その間の難關がどこにあるかといふことを明かに示すやうになつて來た。その難關といふものは多々あるが、最も著しい點は形容詞と助詞との二にあるといふことが、明かにせられ、これらを適切に處置することが出来なければ、決して成功するもので無いといふことを示してゐる。

以上のやうに西洋文典模倣のものが續々出た時代に於いても既に述べた通り、堀秀成、權田直助をはじめとし従來の國語學を遵奉したのも少からずあり、又それらの著述も少くなかつた。そのうち文法又は文典といふ名をつけた主なもの明治二十年までのものからあぐると

皇國文法階梯 一冊 高田義甫 西野古海著 明治六年刊

日本文典暗誦動詞 三冊 片岡正占著 明治九年刊

雅俗文法前編 二冊 里見義著 明治十年刊

雅俗文法便覽 一冊 里見義著

明治十年刊

日本文典一名倭文機 前編二冊（雅俗文法前編を改題したもの）

後編二冊 里見義著 明治十九年刊

などである。なほそのほかのもので主なるものは

語彙別記 一冊 文部省編輯寮編 明治四年刊

語彙活語指掌 一冊 同上

語學指南 四冊 佐藤誠實著 明治十二年刊

小學用語格 一冊 稻垣千穎著 明治十四年刊

詞の橋立 二冊 弘鴻著 明治十八年刊

などである。これらの諸書は從來の説を祖述したもので、西洋文典の影響を受くることのないものである。しかしながら、それらのうちには西洋文典に全く無關心の態度をとり得なかつたものも無いではない。堀秀成の日本語學階梯に凡例に

此書西洋語學ノ譯名ヲ引充タルハ始メ西洋語學ヲ學ビテ後皇國語學ニ入ルモノ、便トスルナリ。

といひ、又言、詞、辭總説の末に括弧して

西洋語學ノ譯名ニ言語ヲ大別シテ八品詞トス。所謂、名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、後詞、接續詞、感歎詞是ナリ。云々

と云ひ、本文には言の下に括弧して

名詞又體等イフ則是ナリ。

と云つてゐるが如きものがその例である。この語學階梯の語を見ると、その名目と排列とから察して、中根淑の文典を見てそれからとつたことは明かである。又雅俗文法は品詞を三分することは舊派の通りであるけれど、これを體言、活用、後置詞と名づけた。その後置詞といふ名目は日本消息文典によつたものである。

かやうにして舊來の國語學をうけついでゐるうちにも西洋文典の影響を多少受けてゐるものが無いとしなかつたのであるが、ここに吾人の注目をひくものは物集高見の初學日本文典である。これは二冊あつて明治十一年に出版したものである。これはその單語の分類をば

體言 用言 接辭

の三種としたのは富樫の三分法によつて名目をかへたことは著しいが、その體言のうちにて、

實體言、 虚體言、 假體言、 代名言、 合體言

の分類をしてゐる。これは富樫の言コトの四の分類と、語學新書の名目とをごつちやにしたもので、條理が立たないといはねばならぬ。これはほんの一例に止まるのであるが、要するに、この書は舊來の説と西洋流の説とが雜然として混在して何等の條理が無いと評すべきものであらう。これはその本旨が、從來の方式を基礎としてそれに西洋文典の説明を加味しようといふことにあつたと思はるるものであるが、これも亦失敗に終つたものである。ここに吾人は西洋文典の方法を以てわが國語を説かうとしたものに、小學日本文典の如く、大綱を西洋にとりてその細目に於いて從來の説を折衷せうと試みたものと、大綱を從來の説により、細目に於いて西洋文典の説を折衷せうと試みたものとの二の方法が試みられたことを見る。しかも、その二者いづれも失敗したものであつた。

明治二十三年に至つて中等教育日本文典(一冊)といふ書が出版せられた。これは落合直文、小中村義象の合著であつて、初等日本文典の亞流といふべきものである。この書の組織は

聲音及文字、言語、文章の三門に分れ、附録として假名遣、字音假名遣、送假名法、句讀法、語格問答を加へたものである。その説に、創見といふものが無く、殆どすべて從來の説によつたと言つてよいもので、言語の部に於いて、體言、用言、助辭の三大別をなし、體言を名詞、代名詞、副詞、接續詞、歎詞の五種とし、用言をば、作用言、形狀言の二種とし、助辭をば、その形からして動助辭、靜助辭としてゐる點などは、大體權田直助の説によつてゐるものらしいが、助辭をば靜動の二者を通じて十四類としてゐる點は恐らくは初學日本文典の二十類に基づいたものであらう。それらの關係を詳説することは今、その違が無いから略するが、要するに初學日本文典よりは稍合理的に進んでゐると見ゆる。この書は一面から見れば、新舊二派を巧みに折衷安排したやうだけれど、その西洋風の名目を入れた所は體言の類別だけのこと、その他は殆ど全く西洋流の方式によらないものである。この書には既に云ふ如く著者の創見の見るべきものは無いけれども、舊來の研究の要點を網羅して、これ一冊で國語の法格すべてにわたつて述べてあるし、その意見も大體に於いてかたよらないものであり、その實例も亦雅馴なものをとつたから、穩健なものとして世に歓迎せられ、汎く行はれ、國語研究の熱を高めたことは明治時代第一に位するも

のといふべきもので、それより後にはまた西洋文典直譯の文典を顧みることが無くなつた。落合小中村の日本文典は形は折衷のやうであるが、その實質は堀秀成權田直助の系統に屬するものであつたが、その後間もなく、折衷文典として大勢力を有する廣日本文典があらはれた。廣日本文典は明治三十年に出版せられたものであるが、その基は語法指南にある。語法指南はもと言海といふ辭書の編纂の爲に作つたもので、言海的首卷をなしたものであるが、その原稿は明治十五年に出來たものだといふ。明治二十年に言海を出版した時にその巻首に加へて出版し、後にこれを別冊として出版し、後又それを訂正増補して廣日本文典と名づけ、その廣日本文典の綱文を以て中等教育日本文典と名づけ、廣日本文典の補説をつくり、之を別記と名づけ、その三部をば、明治三十年に出版したのである。この書は一面に於いて、富士谷成章、鈴木朗、本居春庭、義門等の研究を繼承してその要をとり、一面に於いて田中義廉、中根淑等の研究をも參酌し、二流を調和安排したもので、折衷派の文典としては大體に於いて成績を挙げたものといふべきものである。本書に於ける富士谷の影響はその動詞の語尾變化の表にあらはれてゐる。即ちその活用表は裝圖に基づいて多少變更を加へたものである。また動詞のうちに「在り」の類を加へたのは富樫の説

によつたものである。又八品詞を設けたことは田中以來の爲す所に倣つたものである。かやうにして二者の折衷は到る所に見られ、しかも比較的無難であつて、國語學史の上の一の時期を劃するものと見てよいであらう。そこで、上にも述べた形容詞と助詞とがどう取扱はれたかと見るに、その形容詞といふものは名目は西洋風であるが、實際はまさしく本邦の學者の間に傳へられた形狀言に該當するものである。又亘爾乎波といふ名目を立てて助詞といふ名目さへも用ゐないといふことは、國語の本性を無視しないことを示すものである。かやうにして從來難題となつてゐた點は大體解決せられたのである。しかし、深く考ふると、その動詞形容詞は從來の作用言形狀言と同じく、名詞は體言におなじく、亘爾乎波また古のまゝとすれば、これらは言語四種論に述べた範圍と大差ないものである。その他の品詞、代名詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞が、それらの外に設けられた部分で、これが西洋流の分類を折衷した結果と見らるべきものであるが、それが果して當を得たものか、どうか。ことに助動詞を一品詞と立てたのは西洋にもない事である。助動詞といふのは西洋文典の名目であるが、それは動詞の内部の小區分に屬する名目である。これを一品詞とたてたのは西洋流に見ても不合理であるので明かに失敗と評せねばならぬ。そ

の他、こまかな點には論すべきことが少くない。本書はかくの如く缺陷が少くないものであるけれども、大局から見れば、その範疇の名目は西洋文典のによつたけれども、實質は國語の特性を破ることなく、從來の研究の要をつくして組織した功は認めねばならぬ。顧みれば、鶴峯以來西洋文典の組織に目を奪はれ模倣をなし、折衷を試みて來たこと、ここに六十餘年、はじめて國語をそなふことの少い折衷文典を得たと評すべきである。而して、その前後に於いて國文法の書が多く出たけれど、本書に及ぶものなく、本書が出てからは本書の影響を受けないものは稀である。その間文部省は明治十九年に英國人チャンバレンを聘して東京大學に於いて國語の講義をさせ、又日本小文典を編纂させて明治二十年に文部省から出版したが、別に反響を起すことも無くして立消の姿となつた。これはそれが國語の本質に觸れないものであるから、當然の事である。

大槻文彦の國語學の業績は廣日本文典よりも言海の上に存するであらう。この書は真正の意味に於ける國語辭典のはじめといふべきものである。抑も本邦の辭書は上にいふやうに倭訓栞ではじめてその整つたものを見たといふべきものであるけれども、その名を倭訓栞といふ通りに國語をば漢字の附屬物の如くに見るといふ弊が無いでも無かつた。倭訓栞

前後の他の辭書の事は既に述べたが、明治時代に入つては先づ文部省に於いて日本辭書編纂の企てがあり、編輯寮の事業として之を行つたが、二三年で中絶した。その時に成稿したものは「あいう」の部だけだつたと見えて、それを語彙と名づけて出版したが、「あ」の部五卷は明治四年十一月に「い」の部五卷「う」の部二卷は明治十四年五月に刊行せられた。かの語彙別記、語彙活語指掌といふのはこの語彙の附録としたのである。その後、明治八年三月に文部省は大槻文彦を召して新に辭書を編纂させたのであるが、その功を卒へたのは明治十七年十二月であつて、その稿本が言海なのである。その後明治二十一年に至り、文部省からその稿本を下賜せられ、私著として出版することを許されたから明治二十年から出版して、明治二十四年に到つて完成した。これより先、明治十年に物集高見の日本小辭書といふもの一冊、明治十八年に近藤眞琴の「ことばのその」五冊、明治二十一年に物集高見の「ことばのはやし」一冊、又高橋五郎の和漢雅俗いろは辭典といふやうなものも出たが、いづれもその規模の上、取材の上、組織の上などから見て、不十分と評しなければならぬものであつた。言海は以上數書の後に出たものであるけれども、その體例の整うてゐる點、その解釋の確かな點等で、それらを凌駕したもので、辭書らしい辭書が

本邦に在るのはこれをはじめとする。ただ、語数の少いのと、例證を省いてある點との二は大きな缺點といはねばならぬ。しかしながら、言海は昨今までも國語辭書の標準と目せられてゐる。

十八 馬場辰猪及び口語法の研究

従來の國語の研究は主として歌文の上に用ゐる語に對して行はれた。それは雅言といふことで行はれたのであるが、その雅言といふのは風雅といふやうな意味でなく雅正の意味で、一國の文化を正しく表現する言語と認められたことに基づくのであつた。さういふ點から見て、口語といふものは研究の對象とはならなかつた。しかしながら、詞の八衢には、口語の活用をば、到る所に注意書のやうにして書き加へてあつた。それ故に、口語の活用についての多少の注意は加へられてゐたと思ふが、しかし、それらを主として研究したものは無かつた。明治時代に入つてもはじめは文語の研究に主力を注いだわけだが、だん／＼に口語の方にも目をむくるやうになつた。口語の法則について研究を施したのものとしては

やく出たのは佐藤誠實の語學指南がある。これは四冊あつて明治八年に成り、同十年に出版したもので、元來一般の國語學書なのである。即ち言語を體言、用言、形狀言、助詞の四にわけて、説明したものであるが、その用言を各活用にわたり例の所在を親切に示してある點、及び敬語を説いてある點などいづれも著者の篤實な性格の所産であつて、斬新なことは無いが、いふ所が確實なので、信賴すべき書である。その書の末に俗言活用圖を掲げて口語の用言を示してある。次は里見義の雅俗文法要覽である。これは一冊で、明治十年に出版した。これは同じ人の著した雅俗文法の要をとつて教科用としたものらしいが、その中に別に口語の動詞活用圖をも載せてある。この二著は前後して世に出たものであるが、共に口語にも法則があるといふことを明かにしたものであるからその功は没してはならないものである。ここに一寸注意すべき點は二者共に口語に著眼したが、いづれも用言の活用だけを説いてゐるといふ點である。これは奇妙なやうだけれど、やはり意見のあることである。それは何かといふに、文語と口語との文法上の差異は主として用言の上、ことに活用の上に存するもので、その他はさほど著しい差の無いものであるから、この事實から見れば、其の活用にまづ注意するのは當然の事である。

かやうに、前二者は口語にも法則があるといふことを示したけれども、それらは一局部の事であつた。眞に口語全般にわたつて法則を述べたものは馬場辰猪の日本文典初歩である。この日本文典初歩はたゞ日本文法の爲のみに著したもので無くして、わが國語の死活問題と深い關係にあるものである。明治の初め、森有禮が辨理公使として亞米利加合衆國に居つた時、わが國語は缺點が多くて教育上の役には立たないといふことを説いて、國語を全廢して英語を以て國語としようかと考へて意見を發表して、歐米の學者の意見を求めたことがあつた。それを受けた歐米の學者はその大膽極まる計畫を冷笑するもの、(セイスの如く)又その無謀な企が國家の基礎を危くするものであると教へたもの(ホイットニーの如く)もあり、又返事をしなかつた人もあつた。馬場辰猪は明治前期の政治家として明治政府の一敵國の觀のあつた大人物であるが、當時政治學研究の爲留學して倫敦に居たのである。その際森の意見を聞いて、その謬つた意見を匡さうと思ひ、日本の日常語には秩序井然たる法則があるといふことの證據を實地に見せてやるといふ目的で、英文でこれを草したもので、それを *Elementary grammar of the Japanese language* と名づけて倫敦で出版した。これは西曆千八百七十三年即ち明治六年のことである。この書は百頁許

の小冊子であつて、内容は簡單を主としたけれども、先づ文字から入つて品詞論と文章論とに分れ品詞論中には助詞を *postposition* と譯して出してゐ、文章論には文の組織に關する規則十八條をあげ、なほ終に數多の練習問題を加へてある。その説には今日から見て贊成の出来ないこともあるが、しかし、簡單に書いてはあつたが、要領を得たものである。さうしてこの書の序文に於いて日本語の優秀なことを論じ、日本語で普通教育を完成するに十分であるといふことを痛論して森の意見の謬つてゐるといふことを論破してゐるのは一の偉觀である。而してこれは實に本邦人が外國文で出版した日本文典のはじめであると共に日本語法の全般に通じて組織的に研究したものはじめであつて、著者の國語擁護の熱誠と共にわが國語學史上貴重すべき一大著述である。然るに、この人のその國語擁護の功績も、その國語研究の學績も明治三十九年頃までは全然顧みられなかつた。

馬場辰猪の國語研究はその著書が英文であつた爲と明治政府に忌まれた爲とであつたらうか、國語學界ではその業績を認むることもなく、況んやその研究を繼ぐ人も無くして明治の末期に及んだ。その間に國內で、口語について研究したものは落合直澄の普通語の説といふ一編であらう。(明治二十二年頃の皇典講究所講演にある。)この人の國語上の研究

には他なほ見るべきものがあるが、今は略せねばならぬ。その後、明治三十二年に至つて、三矢重松の口語法の研究が、國學院雜誌に掲げられ、明治三十四年には前波仲尾の日本語典、松下大三郎の日本俗語文典、金井保三の日本俗語文典、石川倉次の「はなしことばのきそく」等があらはれた。しかし、これまでの間に口語法の上に大きな事功をたてたのは馬場辰猪を第一とせねばならぬ。われ／＼はこの國語擁護の大恩人を永遠に記憶して忘れてはならぬ。

昭和十年五月十日印
昭和十年五月十五日第一刷發行

國語學史要

定價八拾錢

著者 山田孝雄

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 白井赫太郎

岩波全書
58

版權所有



發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話(33) 〇〇一八七・〇〇一八八番
九段(33) 〇〇二二二(小賣部専用)
振替口座東京二六二四〇番

精興社印刷 岡山製本

岩波全書發刊に際して

岩波 茂雄

時艱にして朝に諍臣なく野に義人なく舉世滔々義をすて利に走りて恥づるを知らず輦轂の下薫化の重責を負へる者に縲綯の徒を出すが如きに至つては邦家の憂患之に過ぐるものはない。吾人は圖書に衣食する市井の一素町人に過ぎずと雖も先憂後樂君國に微力を捧げんとする奉公の至情に於ては敢て人後に落つるを潔とせざるもの、一の圖書一の雑誌を公にする場合と雖も常に出版の第一義に即し、未だ曾て學術と社會とを思はざることなかりしは自ら顧みて天地に恥ぢざる所である。創業二十年の記念として吾人は曩に全出版物に互る特賣を行ひしが今茲に繼續せる記念事業として岩波全書を刊行せんとする。岩波文庫が東西古典の普及を主眼とするに對し岩波全書は現代學術の普及を目標とする。惟ふに我國學界の研究往々泰西の壘を摩するあるも學術全般に互る社會的水準は歐米のそれに及ばざること尙遠き感なきを得ない。岩波全書は現時の日本社會に於ける此の缺陷を補はんことを志すものである。在來の普及書のやゝもすれば知識の正確を缺く憾あるに鑑み岩波全書は内容を絶對的に信頼し得るものたらしめん爲め學術百科天々の最高權威者に懇請してその敏感熾烈なる學者の良心に委ね、豊富なる知識を平明なる表現に壓縮し之を簡易なる形式に盛りて定價を廉にし自由分賣以て普及に便せんとする。岩波書店は最高至深の研究物を公刊せんとする從來の態度に拍車を加ふると共に此の際更に岩波全書に努力を傾け學術普及の新領域に進出せんことを期する。國歩艱難の秋、國防軍備固より缺く可からざるも學術の普及と相俟つて始めて新日本の光輝は發揚せらるべし。吾人の此の企圖も學術立國の趣旨を體し時難に課せられし吾人の責務を果さんとするの微衷に出づるのみ。敢て同愛好學の士の支持を仰ぐ。(昭和八年十二月)

岩波全書刊行書目

〔自由分賣〕

定價各冊 八拾錢

文學

文學概論 茅野 蕭々
文學史論 土居 光知
日本文學思潮 岡崎 義惠
國語學史要(既刊) 山田 孝雄

哲學

哲學の根本問題(既刊) 西田 幾多郎
—行爲の世界—
哲學の根本問題 續編(既刊) 西田 幾多郎
—辯證法的世界—
哲學通論(既刊) 田邊 元

宗教哲學(既刊)

波多野 精一
論理學 高橋 里美
倫理學概論 高橋 穰
現代の心理學 速水 滉
人間學 三木 清
教育學 篠原 助市
人間の學としての倫理學(既刊) 和辻 哲郎
東洋倫理(既刊) 西 晋一郎
西洋哲學史 朝永 三十郎
思想發達史 山内 得立
支那思想史 武内 義雄
日本精神史 村岡 典嗣
佛教概論 矢吹 慶輝
基督教史(既刊) 石原 謙

法律學	法律進化論	穗積重遠	民事訴訟法Ⅱ	菊井維大
法學通論	末弘嚴太郎	政治學	矢部貞治	
法理學	恒藤恭	經濟學	小泉信三	
憲法	佐々木惣一	經濟學原論	中山伊知郎	
行政法ⅠⅡ(既刊)	美濃部達吉	純粹經濟學(既刊)	山田盛太郎	
刑法	牧野英一	マルクス主義經濟學	舞出長五郎	
刑事訴訟法	小野清一郎	經濟學說史	土方成美	
國際法(既刊)	橫田喜三郎	經濟政策原論	大内兵衛	
國際私法	江川英文	財政學	橋爪明男	
民法ⅠⅡ(既刊)	我妻榮	貨幣論	金原賢之助	
民法Ⅲ(既刊)	中川善之助	國際金融	蜷川虎三	
商法ⅠⅡ	田中耕太郎	統計學概論(既刊)	那須皓	
民事訴訟法Ⅰ	兼子一	農村社會學	東畑精一	
		農政學		

日本農業概論(既刊)	東浦庄治	物理實驗法(既刊)	中村清二
日本經濟史概要(既刊)	土屋喬雄	力學	寺澤寛一
數學		音響	小幡重一
代數學(整數論)	高木貞治	溫度	芝龜吉
行列及び行列式(既刊)	藤原松三郎	光	木内政藏
微分學(既刊)	掛谷宗一	電磁氣學	清水武雄
積分學	掛谷宗一	相對性理論	富山小太郎
函數論	竹内端三	量子論	仁科芳雄
解析幾何學	中村幸四郎	原子物理學概論(既刊)	菊池正士
初等微分幾何學(既刊)	窪田忠彦	振動	石本巳四郎
		X線	高橋龍太郎
物理學		光電管及び真空管	西川正治
物理學史	桑木或雄		持田信男
物理學の基礎原理	石原純	天文學・地球物理學	淺田常三郎

宇宙
天體物理學 I
天體物理學 II
小惑星(既刊)
地球物理學(既刊)
地震(既刊)
重力
潮汐(既刊)
氣象學概説
颱風
天氣豫報
時計

松隈健彦
關口鯉吉
萩原雄祐
平山清次
寺田寅彦
坪井忠二
松澤武雄
小倉伸吉
岡田武松
岡田武松
藤原咲平
岡田群司

化學通論(既刊)
無機化學 I II
有機化學 I II(既刊)
化學平衡
電氣化學
光化學
膠質化學
地球化學
生物學
錯鹽
無機化合物分析法
有機化合物分析法(既刊)
有馬純三
鮫島實三郎
柴田雄次
漆原義之
片山正夫
龜山直人
堀場信吉
玉蟲文一
木村健二郎
柿内三郎
井上敏
木村健二郎
有馬純三

化學

地質學・地理學

岩石學
造岩礦物
自然地理學
(題未定)
文化地理學

坪井誠太郎
神津俣祐
岡田武松
矢部長克
辻村太郎

東亞植物(既刊)
動物學史
發生學(無脊椎動物)
發生學(脊椎動物)
魚
人類的起源
人體寄生蟲通説(既刊)
中井猛之進
丘英通
大島廣
犬飼哲夫
内田惠太郎
清野謙次
小泉丹

生物學
細胞學概論(既刊)
實驗遺傳學
生物進化
植物學史
植物形態學
植物生理學
植物生態學

山羽儀兵
木原均
小泉丹
柴田桂太
郡場寬
額瀨理一郎
中野治房

機械工學
材料力學
工業熱力學
蒸汽機關(既刊)
蒸汽罐
ダイヤゼル機關
小野鑑正
菅原菅雄
山田嘉久
石川政吉
渡部寅次郎

冷凍及び冷凍機	井口春久	送電・配電	安藏彌輔
水力學(既刊)	宮城晋五郎	有線通信工學	大橋幹一
ポンプ及び水壓機(既刊)	沖巖	無線通信工學	楠十嵐秀二
水車(既刊)	生源寺順	テレビジョン(既刊)	安瀨雄次郎
齒車(既刊)	成瀬政男	電力應用	曾根有
機械工作法	大越諄	電燈及び照明(既刊)	大山松次郎
機關車	橋本新助	光電管及び真空管	關重廣
	島本秀雄	電氣鐵道(既刊)	淺田常三郎
電氣工學			米澤政治郎
電磁氣學	清水武雄	航空學	
電氣磁氣測定	神保成吉	航空發達史	有川鷹一
汽力發電ⅠⅡ	後藤清太郎	飛行機	守屋富次郎
水力發電	弘山尙直	飛行艇	橋本賢輔
發電水力(既刊)	高橋三郎	航空船	(交手中)中村龍輔

航空發動機	田中敬吉	建築學	伊東忠太
航空計器(既刊)	佐々木達治郎	建築史	吉田享二
土木工學		建築材料	内田祥三
測量	關信雄	建築構造汎論	佐野利器
鐵筋コンクリート(既刊)	宮本武之輔	耐震構造汎論(既刊)	谷口利忠
土の力學	山口昇	施工法	富永長治
橋梁(既刊)	成瀬勝武	建築裝飾及び意匠	岸田日出刀
鐵道	平井喜久松	建築法規	笠原敏郎
港灣(既刊)	鈴木雅次	工業化學	
道路	藤井眞透	應用化學通論ⅠⅡ	田中芳雄
都市計畫	榎木寛之	紡織纖維	厚木勝基
發電水力(既刊)	高橋三郎	染料化學	牧銳夫
		油脂化學	桑田勉

石油化學	田中芳雄	生理學上下(既刊)	橋田邦彦
瓦斯及びコークス	大島義清	生化學	柿内三郎
液體燃料	永井雄三郎	病理學	三田篤志郎
窯業	近藤清治	血清學	三田定則
寫眞(既刊)	藤澤信	藥理學	田村憲造
金屬と合金(既刊)	飯高一郎	神經病學	鹽谷不二雄
鑛山學		衛生學	戸田正三
鑛山	佐野秀之助	社會衛生學(既刊)	暉峻義等
浮游選鑛法	山口吉郎	勞働衛生	暉峻義等
		人體寄生蟲通説(既刊)	小泉丹
		X線	西川正男
醫學		農學	持田信男
人體解剖學(既刊)	西成重武	土壤學	麻生慶次郎
比較解剖學	西成重武	肥料	麻生慶次郎

營養化學(既刊)	鈴木梅太郎		
應用微生物學	坂口謹一郎		
蠶(既刊)	石森直人		
畜産學汎論(既刊)	岩住良吾		
植物病學汎論(既刊)	芝田清武		
農村社會學	逸見武雄		
農政學	那須皓		
日本農業概論(既刊)	東畑精一		
	東浦庄治		

岩波全書既刊書目

〔自由分賣〕

定價各册八拾錢
送料各册八拾錢

- | | | |
|----|--------------------|-------|
| 11 | 地震 | 松澤武雄 |
| 10 | 地球物理學 | 坪井忠二 |
| 9 | 微分學 | 掛谷宗一 |
| 8 | 日本農業概論 | 東浦庄治 |
| 7 | 純粹經濟學 | 中山伊知郎 |
| 6 | 民法Ⅲ(親族・相続) | 中川善之助 |
| 5 | 民法Ⅰ(總則・物權上) | 我妻榮 |
| 4 | 國際法 | 橫田喜三郎 |
| 3 | 行政法Ⅰ | 美濃部達吉 |
| 2 | 哲學通論 | 田邊元 |
| 1 | 哲學の根本問題
—行爲の世界— | 西田幾多郎 |

- | | | |
|----|-------------|--------|
| 12 | 細胞學概論 | 山羽儀兵 |
| 13 | 水力學 | 宮城音五郎 |
| 14 | 航空計器 | 佐々木達治郎 |
| 15 | 港灣 | 鈴木雅次 |
| 16 | 金屬と合金 | 飯高一郎 |
| 17 | 人體解剖學 | 西成重武 |
| 18 | 生理學上 | 橋田邦彦 |
| 19 | 人間の學としての倫理學 | 和辻哲郎 |
| 20 | 東洋倫理 | 西晉一郎 |
| 21 | 統計學概論 | 蜷川虎三 |
| 22 | 日本經濟史概要 | 土屋喬雄 |
| 23 | 物理實驗法 | 中村清二 |
| 24 | 有機化合物分析法 | 有馬純三 |
| 25 | 齒車 | 成瀬政男 |

- | | | |
|----|------------------------|-------|
| 26 | 鐵筋コンクリート | 宮本武之輔 |
| 27 | 電燈及び照明 | 關重廣 |
| 28 | テレビジョン | 曾根有 |
| 29 | 有機化學Ⅰ | 漆原義之 |
| 30 | 耐震構造汎論 | 佐野利器 |
| 31 | 寫眞 | 谷口忠信 |
| 32 | 基督教史 | 藤澤信 |
| 33 | 哲學の根本問題 續編
—辯證法的世界— | 石原謙 |
| 34 | 行政法Ⅱ | 西田幾多郎 |
| 35 | 初等微分幾何學 | 美濃部達吉 |
| 36 | 生理學下 | 窪田忠彦 |
| 37 | 潮汐 | 橋田邦彦 |
| 38 | 民法Ⅱ(物權下・債權) | 小倉伸吉 |
| 39 | 電氣鐵道 | 我妻榮 |
| | | 米澤政治郎 |

- | | | |
|----|----------|-------|
| 40 | 行列及び行列式 | 藤原松三郎 |
| 41 | 橋梁 | 成瀬勝武 |
| 42 | 水車 | 生源寺順 |
| 43 | 社會衛生學 | 暉峻義等 |
| 44 | 畜産學汎論 | 岩住良治 |
| 45 | 植物病學汎論 | 芝田清吾 |
| 46 | 小惑星 | 逸見武雄 |
| 47 | 蠶 | 平山清次 |
| 48 | 宗教哲學 | 石森直人 |
| 49 | 榮養化學 | 波多野精一 |
| 50 | 原子物理學概論 | 鈴木梅太郎 |
| 51 | 化學通論 | 二國正士 |
| 52 | 東亞植物 | 菊池正士 |
| 53 | ポンプ及び水壓機 | 鮫島實三郎 |
| | | 中井猛之進 |
| | | 沖巖 |

58	57	56	55	54
國語學史要	人體寄生蟲通說	蒸汽機關	發電水力	有機化學Ⅱ
山田孝雄	小泉丹	山田嘉久	高橋三郎	漆原義之



